

埋蔵文化財調査報告書52

松ヶ洞古墳群（13号墳・15号墳）

2005

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書52 正誤表

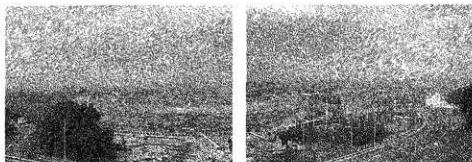
頁	位置	誤 ⇒ 正
2	8行目	竜泉寺街 ⇒ 竜泉寺街道
20	14行目	第2次盛土 ⇒ 第2次盛土
25	4行目	1966年調査 ⇒ 1963年調査
37	第40図	T4奥壁 ⇒ T4奥壁
39	22行目	第1埋葬施設の墓坑 ⇒ 第1埋葬施設の墓坑
53	19行目	「勢瀨尾」第3号、 ⇒ 「勢瀨尾」第3号
56	左上 図版番号	図版第一 ⇒ 図版第三
58	左上 図版番号	図版第一 ⇒ 図版第五
60	報告書抄録	調査面貫 ⇒ 調査面積

なお、下記の挿図において一部の文字が化け、お見苦しい図となりました点、お詫びいたします。

頁	位置
3	第3図左上 凡例
5	第4図 「吉根」 「東谷山」 の文字
6	第5図下段 古墳名

埋蔵文化財調査報告書52

松ヶ洞古墳群（13号墳・15号墳）



松ヶ洞古墳群からの平野部の眺望（左・北西 右・北）

例言

◆本書は、松ヶ洞13号墳および松ヶ洞15号墳の発掘調査報告書である。

◆発掘調査期間は下記のとおりである。

松ヶ洞13号墳：平成16年1月13日～平成16年2月27日

松ヶ洞15号墳：平成16年5月10日～平成16年6月11日

◆発掘調査にかかる市教委の各担当は下記のとおりである。

松ヶ洞13号墳

(調整事務) 小島 一夫 (文化財保護室 学芸員)

(現地調査) 藤井 康隆・深谷 淳 (見晴台考古資料館 学芸員)

(整理作業) 藤井 康隆

松ヶ洞15号墳

(調整事務) 小島 一夫・水野 裕之 (文化財保護室 学芸員)

(現地調査) 藤井 康隆・野口 泰子 (見晴台考古資料館 学芸員)

(整理作業) 藤井 康隆

◆発掘調査にかかる構土工事および測量、科学分析は下記の業者がおこなった。

松ヶ洞13号墳

(構土工事) 日之出造園株式会社

(基準点・水準点測量および調査前状況の地形測量) 株式会社カナエジオマックス

松ヶ洞15号墳

(構土工事) 日之出造園株式会社

(基準点・水準点測量および調査前状況の地形測量) 株式会社G I S 中部

(科学分析) 鶴バレオ・ラボ

◆発掘調査にあたり、松ヶ洞13号墳土地所有者 榊原 誠氏、同15号墳土地所有者 榊原 孝氏からは寛容なご理解とご協力を賜った。深謝申し上げます。

◆本書の編集は藤井がおこなった。本文の執筆は、下記を除き、他はすべて藤井が執筆した。

第三章第四節 藤井・深谷 (節内の分担箇所は文末に表記)

第五章 藤根 久 (鶴バレオ・ラボ)

◆整理作業および図面の作製は、藤井のほか、笹栗 拓(岡山大学学生)、橋上 佐知子がおこなった。

◆本書で使用する座標・水準値は、世界測地系国土地院第Ⅶ系基準および東京湾海面水準 (T.P.) にもとづく。

◆発掘調査中および報告書作成にあたり、ここにご芳名を記す方々から多大のご教示とご助力を賜った。深く感謝申し上げます。

杉浦 綾子 (現・美濃加茂市民ミュージアム/当時、名古屋市立大学研究員)

瀬川 貴文 (名古屋博物館)

中井 正幸 (大垣市教育委員会)

永井 智教 (深谷市教育委員会)

森島 一貴 (現・京都府立大学大学院 博士前期課程/当時、花園大学学生)

(以上、氏名五十音順、敬称略)

目次

第一章 古墳群をめぐる環境

第一節 古墳の位置	1
第二節 地理的環境	3
第三節 周辺の遺跡	4

第二章 既往の調査と研究

第一節 松ヶ洞古墳群における既往の調査成果	7
第二節 先行研究における松ヶ洞古墳群の評価	13

第三章 松ヶ洞13号墳

第一節 調査の目的	14
第二節 調査区の設定と旧トレンチの消掃調査	14
第三節 墳丘の調査	16
第四節 埋葬施設の調査	22
第五節 出土遺物	25
小結	28

第四章 松ヶ洞15号墳

第一節 調査の経過と目的	29
第二節 調査区の設定	29
第三節 墳丘の調査	31
第四節 埋葬施設の調査	36
第五節 出土遺物	40
小結	44

第五章 自然科学分析

15号古墳赤色土の蛍光X線分析	45
総括	46
引用参考文献	47

報告書抄録

挿図目次

第1図 松ヶ洞13号墳・15号墳の位置	1	第6図 松ヶ洞古墳群の既往の成果(1)―8号墳	9
第2図 松ヶ洞古墳群分布図	2	第7図 松ヶ洞古墳群の既往の成果(2)―9号墳	11
第3図 守山区西部の地形区分	3	第8図 松ヶ洞古墳群の既往の成果(3)―10～12号墳	12
第4図 周辺遺跡分布図・一覽	5	第9図 調査前の墳丘	14
第5図 松ヶ洞古墳群周辺の地形と古墳	6	第10図 樹木伐採後の墳丘	14

第11図	1963年調査時の松ヶ洞13号墳	15	第32図	円筒埴輪実測図(3)	30
第12図	今回発掘調査前の墳丘測量図	16	第33図	表土除去作業風景	32
第13図	墳丘トレンチ開口状況	17	第34図	発掘調査前 墳丘測量図	33
第14図	墳丘旧トレンチ断面図	17	第35図	墳丘検出作業風景	34
第15図	南張出部の葎石	18	第36図	周溝平面プラン検出状況	34
第16図	西(CW)アゼ墳裾断面	18	第37図	T1南壁面	35
第17図	墳丘東面の葎石	18	第38図	T1奥壁面で検出した凝土	35
第18図	表土除去時 CN、CWアゼ断面図	19	第39図	墳丘断割り断面図(1)	36
第19図	南(CS)アゼ 南張出部の断面	20	第40図	墳丘断割り断面図(2)	37
第20図	北東墳裾アゼ断面図	20	第41図	墳丘測量図とエレベーション図	38
第21図	南東墳裾アゼ断面図	20	第42図	埋葬施設平面図	40
第22図	墳丘断割り断面図(CS、CE)	21	第43図	埋葬施設断面図	41
第23図	発掘調査後 墳丘測量図	22	第44図	第1埋葬施設の敷石と墓坑	42
第24図	墳丘NSライン上エレベーション図	22	第45図	円筒埴輪実測図(1)	43
第25図	北張出部 葎石平面図	23	第46図	円筒埴輪実測図(2)	44
第26図	南張出部 葎石平面図	24	第47図	円筒埴輪実測図(3)	45
第27図	埋葬施設	25	第48図	円筒埴輪実測図(4)	46
第28図	埋葬施設 平面図・断面図	26	第49図	円筒埴輪実測図(5)	47
第29図	旧第1トレンチ断面図	27	第50図	第2埋葬施設木棺内赤色塊の化学組成	49
第30図	円筒埴輪実測図(1)	28	第51図	第2埋葬施設西小口側赤色部の化学組成	50
第31図	円筒埴輪実測図(2)	29	第52図	第2埋葬施設断ち割り内岩石付葎赤色部の 化学組成	51

図版目次

図版第一	(松ヶ洞13号墳)	墳丘全景(南東より)	墳丘西面の葎石
図版第二	(松ヶ洞13号墳)	墳丘全景(北より)	墳丘北面の葎石 墳丘北西の葎石 墳丘西面の葎石 南張出部の葎石(1)・(2) 埋葬施設(南より) 埋葬施設完掘後の墓坑
図版第三	(松ヶ洞13号墳)	墳丘断割り断面(CSライン西面)・(CEライン北面)	墓坑平面プラン検出状況 木棺痕検出状況 円筒埴輪(1)~(3) 墳丘出土の上飾器
図版第四	(松ヶ洞15号墳)	墳丘全景(北西より)	第1埋葬施設(南東より)
図版第五	(松ヶ洞15号墳)	埋葬施設完掘全景 墳丘全景(北東より)	T2西壁断面 T2東壁と奥壁断面 第1埋葬施設墓坑平面プラン検出状況
図版第六	(松ヶ洞15号墳)	円筒埴輪①グループ 口縁 円筒埴輪①グループ	2段目~1段目 円筒埴輪①グループ 1段目 円筒埴輪①グループ 基部 円筒埴輪②グループ 円筒埴輪③グループ 口縁 円筒埴輪③グループ(突帯剥離) 上飾器片

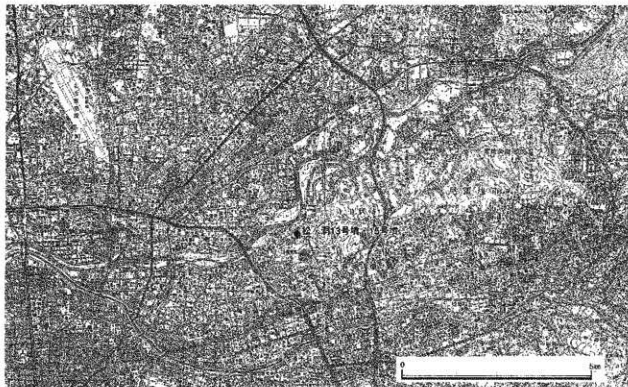
第一章 古墳群をめぐる環境

第一節 古墳の位置

松ヶ洞13号墳・15号墳は名古屋市守山区竜泉寺二丁目に位置する。名古屋市は庄内川・矢田川、伊勢湾（名古屋港）により南・北・西の三方を水界に囲まれ、その北東部から南東部にかけては丘陵ないし山地が広がっている。その面積は326.45km²、人口約220万人を有し、東京・大阪とならぶ三大都市圏を形成する政令指定都市である。もう少しくわしくみると地理的にはおおきく四つの区域からなる。すなわち約6万年前に名古屋港海中に形成された熱田層が隆起した名古屋台地、北東部・東部の山地・丘陵地帯、木曾三川が形成した濃尾平野の南東端部、そして知多半島へと連なる鳴海大丘陵である。

松ヶ洞古墳群の所在する守山区は、昭和38年2月まで守山市として独立した自治体であった。現在の名古屋市の北東部を占め、竜泉寺丘陵から東谷山にかけての東濃の山々に連なる山地・丘陵と、河川に囲まれた地域である。北東端にある標高198.3mの東谷山は名古屋市の最高所であるが、いっぽうで庄内川中下流に面しては広い河岸段丘と後背湿地が広がる。松ヶ洞古墳群の位置は竜泉寺丘陵の南西端の尾根上にあたり、おおきくは東部の山地から濃尾平野・名古屋台地にむかって張り出す丘陵の先端附近に立地しているとみることができる。

松ヶ洞古墳群は、古墳の分布する尾根筋の別により北支群・中央支群・南支群に分けられる。北支群は庄内川のすぐ際にあたる標高約55m程度の比較的低下な丘陵頂部にある1～4号墳である。中央支群では標高約65～80m程度のより高い中央の尾根上に5号墳～16号墳が展開している。南支群は谷底平野中に奥



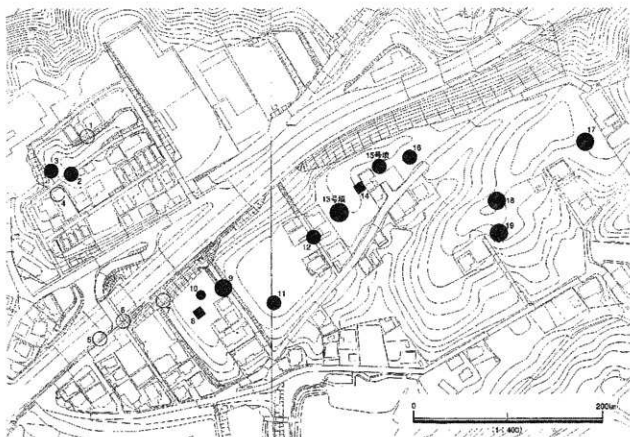
第1図 松ヶ洞13号墳・15号墳の位置 (S=1:100000)

まった丘陵の小突端部頂に17～19号墳が存在する。合計26基を数える尾張では有数の古墳群である。また南西に少し離れた丘陵端部の小幡緑地1～3号墳を当古墳群にふくめて考える意見もあり、かりにこれをくわえるならば29基ということになる。

中央支群については古墳分布状況から、標高約65～75mの丘陵先端部寄りにある中央西グループと、標高約79～80mの丘陵頂部側にある中央東グループにさらに小区分することができる。松ヶ洞13号墳と15号墳は、この中央支群のうち中央東グループに属している。中央東グループの古墳は、丘陵尾根筋上の高い側から、16号墳、15号墳、14号墳、13号墳、12号墳の順に位置している。なかでも15号墳の位置は、隣接する16号墳とともに標高約80.5mの最高所を占め、またその直下の麓はほぼ竜泉寺街が古根・志段味へ向かって降り始める峠の位置にあたる。

この中央東グループの一帯からは、西～北側に眺望がおおきく開ける。北西には遙か不破関を望み、北方には眼下に庄内川中流の流れを、遠くは御嶽山を眺めて広く濃尾平野を見渡し、また北東には東谷山・高座山が見える。松ヶ洞古墳群全体のなかでも、眺望・視界角度ともに最高の位置である。このような景勝の地であることが、尾張でも随一の古式群集墳の墓域として選地された所以のひとつであろう。

また庄内川に臨むこの古墳群の立地からは、河川との関係をも想定させられる。丘陵から庄内川へ降りれば、そこには河原と平地が存在している。輸送、農耕、居住などさまざまな面で便をはかりえたであろう。古墳群を築く集団が活動するに足る、水陸の要地をかねそなえた位置であったとおもわれる。

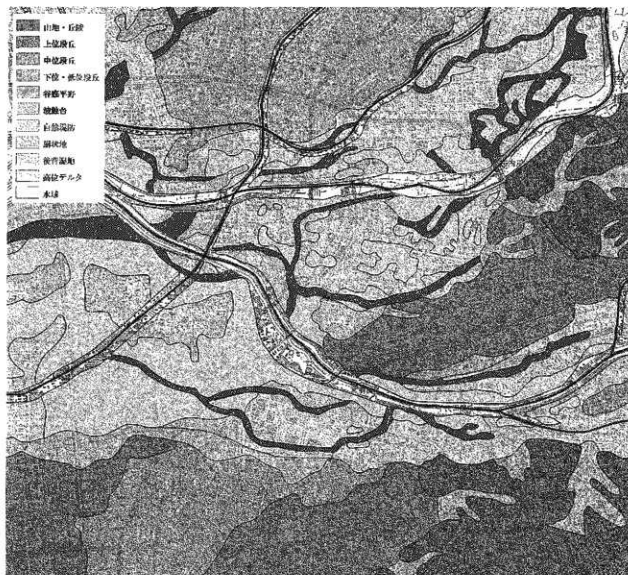


第2図 松ヶ洞古墳群分布図

第二節 地理的環境

松ヶ洞古墳群が位置する竜泉寺丘陵は、庄内川を眼下に望む位置にまで北へ張り出し、北東端の東谷山・志段味地区と守山・名古屋台地との間を遮断している。竜泉寺丘陵の尾根間には随所に谷底平野が形成されており、両地域をつなぐ陸路は、丘陵を直接登る以外には、この谷筋を利用するほかない。松ヶ洞古墳群が立地する尾根は、守山の上位段丘面や後背湿地に面し、かつ竜泉寺丘陵をもっとも深く挟む谷底平野に臨む環境のなかにある。この谷筋には現在は県道15号-30号線が通るが、以前より俗に竜泉寺街道とよばれ、周辺の谷底平野は田畑や溜池として、丘陵上は宅地として利用されている。

竜泉寺丘陵近辺では上位段丘がなだらかな傾斜のある高台となっている。またやや下降した守山・小幡では面的な広がりがある平坦地をなしており、前方後円墳をはじめ多くの遺跡が分布している。また庄内川の後背湿地も丘陵の下縁部まで接近して広がり、その随所には自然堤防が形成されているが、こうした守山区西部の低地面では遺跡の分布はいまのところ知られていない。



第3図 守山区西部の地形区分 (■は旧河道)

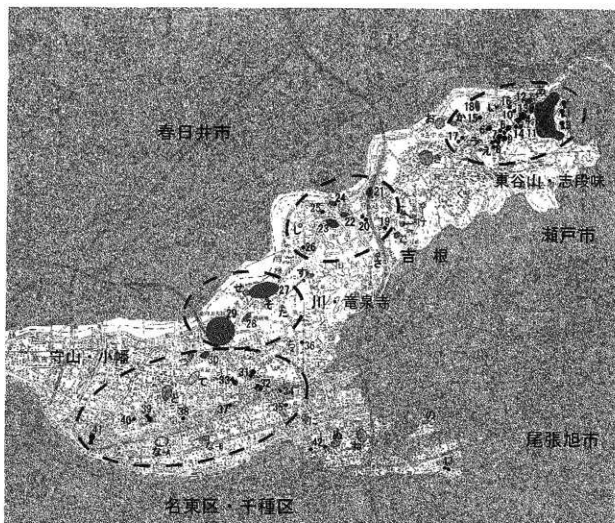
第三節 周辺の遺跡

守山区における古墳分布は、大きく東谷山・志段味地区、吉根地区、川・竜泉寺地区、守山・小幡地区の4地区にわけられる。松ヶ洞古墳群は、川・竜泉寺地区の東部にあり、東谷山・志段味地区へといたる竜泉寺丘陵の峠部分にあたる。この峠を境にして、東谷山・志段味地区はある意味で閉じた空間を形成し、吉根地区もこの峠を東に降った竜泉寺丘陵麓から庄内川岸にかけてである。吉根地区では、笹ヶ根古墳群が古墳時代中期～後期後半までの古墳からなり、川・竜泉寺地区に似た様相をしめすが、それ以外の東禅寺古墳群・上島古墳群などは後期後半の古墳群で、むしろ様相は東谷山・志段味地区の横穴式石室をもつ古墳群に近い。なかでも上島古墳群や深沢古墳群、越水古墳は、終末期に近い時期の古墳である。守山区では東谷山・志段味地区の白鳥塚古墳、尾張戸神社古墳、中社古墳、南社古墳、守山・小幡地区の守山白山神社古墳をのぞけば、前期古墳の分布はほとんどみとめられず、一部の古墳は古墳時代中期に遡るものの、守山区に分布する古墳の圧倒的多数が後期後半の古墳である。

川・竜泉寺地区では、松ヶ洞古墳群がもっとも古墳が集中する。また地区西部のいわゆる「東山」山頂から丘陵突端附近にかけて川東山古墳群が存在し、守山・小幡段丘や庄内川低地に臨んでいる。川東山古墳群は、すでにほとんどの古墳が削平されたが、横穴式石室をもつ直径10～30m程度の円墳を中心とした古墳群であった。4号墳では埴輪周辺から6世紀代以降の須恵器片多数のほか、古墳時代前期の円筒埴輪片が300片以上も出土し、もと前期古墳が存在した可能性が注目される。さらに同じ丘陵上の川東山遺跡で、須恵器の筒形器台や朝鮮半島系陶質土器の有蓋高坏が出土していることも重要である。その日と鼻の先、守山・小幡段丘の北東端には牛牧離れ松遺跡があり、古墳時代中期後半～後期前葉の小方墳群が展開し、須恵器やいわゆる尾張型円筒埴輪・家形埴輪が出土している。

竜泉寺丘陵を丘陵縁に沿いに南へいった突端部に、小幡茶臼山古墳が存在する。小幡茶臼山古墳は、東山61号窯式期（陶器TK10～MT85窯型式併行期）に位置づけられる、墳長約60mの前方後円墳で、南東くびれ部に造り出しをもつ。埋葬施設はいわゆる畿内系の片袖横穴式石室だが、左片袖である。また埴輪をもたないこと、玄門部附近に加工石による扉状閉塞施設があり、玄室に組合式家形石棺を据えていたことが特筆できる。守山区の古墳時代中期以降の古墳としては、丘陵上に立地する唯一の前方後円墳である。尾張ではいまだ埴輪、それも尾張型埴輪を使用する古墳が多い時期にもかかわらず、この古墳が埴輪をもたないことは、畿内系とされる横穴式石室の構造とあわせて、尾張的な色彩の払拭と評価する意見【服部1999】もあり、注目される古墳である。

小幡茶臼山古墳から見下ろす上位段丘面の平坦地に、小幡長塚古墳と池下古墳がある。小幡長塚古墳は墳長約81mの前方後円墳で、埴輪をもつ。もと整った盾形周濠をそなえたが、現在は住宅地に囲まれ往時の面影はない。池下古墳は、東山11号窯式期（陶器TK23～TK47型式併行期）、墳長約40mの前方後円墳で、円筒埴輪や須恵器の脚付七連坏・有蓋高坏・鉄鏝などを出土した。盾形周濠をそなえ、埋葬施設は、すでに破壊されていたもののくびれ部付近で石組みの排水溝状施設が検出され、横穴式石室と考えられている。さらに周辺には、大森大塚古墳、先生塚古墳など、6世紀前葉ごろと考えられる古墳が存在したが、詳細は不明である。またこれらの古墳の西方には、組合式石棺をもつ直径16mの円墳・小幡古墳（7世紀前葉）、大型の須恵質円筒埴輪をもつ墳長約63mの前方後円墳・守山鶴草山古墳（東山61号窯式期か）、古



No.	古墳名	時期	No.	古墳名	時期	No.	遺跡名	主な時代
1	尾家戸神社古墳	古墳前	21	東禅寺古墳群	古墳後	あ	白鳥遺跡	縄文
2	中江古墳	古墳前	22	深沢古墳群	古墳後	い	志段味銅剣出土地	弥生
3	南社古墳	古墳前	23	笹ヶ根古墳群	古墳前～後	う	榎木遺跡	縄文
4	白鳥塚古墳	古墳前	24	上鳥古墳群	古墳後	え	之輪遺跡	縄文
5	志段味大塚古墳	古墳中	25	越水古墳	古墳後	お	天白元屋敷遺跡	古代～中世
	大塚2号墳	古墳中～後	26	村田古墳	古墳	か	志段味城跡	中世
	大塚3号墳	古墳中～後	27	松ヶ洞古墳群	古墳中～後	き	湿ヶ池跡	古代～中世
6	勝手塚古墳	古墳中～後	28	小幡緑地1～3号墳	古墳	く	南原古窯	古代
	東大久手古墳	古墳中～後	29	川東山古墳群	古墳前～後	け	長畑間古窯群	中世
8	西大久手古墳	古墳中～後	30	川東山遺跡	古墳	こ	生下り1・2号窯	中世
	大久手3号墳	古墳中～後	31	牛牧庵レ松遺跡	古墳中～後	さ	吉根古窯	古代
	大久手4号墳	古墳中～後	32	小幡茶臼山古墳	古墳後	し	山神遺跡	古代
9	大久手5号墳	古墳中～後	33	池下古墳	古墳中～後	す	八巻1～3号窯	中世
	山の田古墳	古墳後		池下2号墳	古墳	せ	竜泉寺城跡	中世
11	東谷山古墳群	古墳後	34	小幡長塚古墳	古墳中～後	そ	松ヶ洞古窯	中世
12	白鳥古墳群	古墳後	35	大森大塚古墳	古墳	た	小幡緑地古窯群	中世
13	置塚古墳群	古墳後	36	先生塚古墳	古墳	ち	芥天洞古窯	中世
14	寺山1・2号墳	古墳	37	八幡神社古墳	古墳	つ	川村北城・川村南城	中世
15	羽籠古墳	古墳中～後	38	小幡古墳	古墳後	て	牛牧遺跡	縄文
16	塚本古墳	古墳後	39	小幡南鳥古墳	古墳	な	小幡城跡・西城遺跡	中世・弥生
17	寺林1号墳	古墳前	40	守山鶴草山古墳	古墳後	は	小幡寺寺	古代
	寺林2号墳	古墳	41	町北古墳	古墳	に	大森城跡	中世
18	西家塚・駒東遺跡	古墳～中世	42	守山白山神社古墳	古墳前	ぬ	米田城跡	中世
19	太鼓ヶ根古墳	古墳	43	六ヶ塚1・2号墳	古墳	ね	大森遺跡	古代～中世
20	日ノ後1・2号墳	古墳		二子1・2号墳	古墳	の	白山古窯群	中世

第4図 周辺遺跡分布図・一覧

墳時代前期に廻り埴輪をもつ墳長約90mの前方後円墳・守山白山神社古墳などが守山段丘上に分布する。これらの前方後円墳を中心とした古墳は、みな矢田川に面した守山段丘南側の縁辺に沿って立地している。

古代には、守山段丘上に8世紀ごろの寺院址・小幡原寺があり、寺院を営むような有力集団の存在をうかがえる。また中世には城郭が多く、守山城・小幡城・川村城などのほか、松ヶ洞古墳群附近にも竜泉寺城が存在し、これらが守山・小幡上位段丘面から竜泉寺丘陵にかけての庄内川に臨む縁辺部に立地していることがわかる。この一帯はしばしば三河・尾張の衝突の地で、たとえば小牧・長久手の戦いの折には徳川家康が小幡城を、羽柴秀吉が竜泉寺城を最前線として対峙し、庄内川の渡河点は竜泉寺下であった。竜泉寺丘陵周辺は尾張・三河の接触地帯であると同時に、庄内川という大型河川の渡河点でもある第一級の要衝であったことがわかる。さきあげた城郭遺跡の立地は、このことを非常によくしめしている。



第5図 松ヶ洞古墳群周辺の地形と古墳

第二章 既往の調査と研究

第一節 松ヶ洞古墳群における既往の調査成果

松ヶ洞古墳群が当地域ではじめて知見にのぼるのは、昭和7年刊行の小栗鐵次郎の報告【小栗1932】によってである。そこでは7基の円墳の存在が記載されている。その後、柴田隆、林栄吉により調査がなされ、埴輪、須恵器などの表面採集遺物もしられるようになった。

1959年、守山市（当時）が、宅地造成その他の開発による古墳の減失を見通して、昭和33年より古墳の分布調査に着手した。その一環で松ヶ洞古墳群でも調査がおこなわれ、複数の支丘にわかれる丘陵尾根上に、計26基の古墳が確認された。8号墳については、このときに発掘調査が実施された。また13号墳は松ヶ洞古墳群中で最大の墳丘規模をもつことが認識され、墳丘東裾で円筒埴輪片1点、墳丘中腹で古式須恵器片1点が採集された。

1963年2月に守山市が名古屋市と合併して守山区となったのをうけ、守山市がおこなってきた古墳の調査を、名古屋市経済局と名古屋市教育委員会がひき継いで進めることとなった。これに際して松ヶ洞古墳群は本格的に調査対象となった。1963年12月から翌1964年3月にかけて、名古屋市教育委員会の委託を受け、久永春男を団長とする調査団が、9・10・13号墳の発掘調査を実施した。ひきつづいて1965年3月にも、やはり名古屋市教育委員会の委託を受けた久永春男以下の調査団により、11・12号墳の発掘調査がおこなわれた。

その後長く松ヶ洞古墳群での調査の機会はなかったが、2000年になり、集合住宅建築の計画により、14号墳が名古屋市教育委員会により発掘調査された。調査は名古屋市見晴台考古資料館が実施し、服部哲也・齋藤茂が担当した。

ここまで松ヶ洞古墳群における従来の発掘調査について経緯をのべたが、以下では各古墳の調査成果の概要をまとめる。

松ヶ洞古墳群の概要【守山市教委1963、名古屋市教委1966】

1号墳

直径7.5m、高さ0.5mの円墳。

2号墳

直径14m、高さ1.3mの円墳。大型の埴の嗣部らしき須恵器片を採集したという。

3号墳

直径15m、高さ1.6mの円墳。

4号墳

直径10m、高さ1mの円墳。

5号墳

直径9m、高さ1mの円墳。

6号墳

直径9m、高さ0.75mの円墳。8号墳調査の際、トレンチ調査をおこなったが埋葬施設はみつからな

かったという。

7号墳

直径10m、高さ1mの円墳。

8号墳

一辺8.4m、高さ1mの方墳で、墳長平坦面の広さは一辺3.4m程度であったという。墳丘斜面には葺石があった。墳頂部では並行して接する2基の粘土層が確認された。木棺は割竹形木棺と推定された。墳丘の四辺を、朝顔形埴輪をふくむ円筒埴輪列が圍繞し、30個体あまりの原位置の円筒埴輪が確認された。また墳丘西裾では転落した状態で冢形埴輪が出土し、さらに墳丘西裾には須恵器の礎、脚付七連蓋杯、無蓋高杯が配置されていた。副葬品は、1号棺から六鈴鏡・瑪瑙勾玉・とガラス小玉、ガラス丸玉が出土し、2号棺からはS字文鏡・碧玉製管玉・ガラス小玉・ガラス丸玉・ミカン玉・刀子・鉄剣・鉄鏃が出土した。東山11号窯式期（陶邑TK23～TK47号窯式併行期）の築造と考えられる。

9号墳

直径16m、高さ1.5mの円墳で、3棺並列するほぼ東西主軸の木棺が良好に残存していた。北棺は両小口端を粘土でおさえた木棺直葬で、小口が平直な形態の木棺であった。棺内底に赤色顔料が塗られていた。中央棺は粘土使用のみとめられない単純な木棺直葬で木棺形態は北棺と同様であった。やはり棺内底一面に赤色顔料が塗られていた。南棺は両小口が「凹」字状で棺床断面形が平坦であることからおそらく箱式木棺で、この両小口の凹部には粘土を充填して固定されていた。この充填粘土上面には赤色顔料が塗られていた。いずれも埋葬頭位は東、埋葬順序は盛土との関係から南棺、北棺、中央棺の順と報告されている。副葬品は北棺内から直刀・刀子・鉄鏃・鉄製複環式鏡板付轡が、中央棺では棺内から直刀・鉄鏃が出土し、棺上面とおもわれる位置から鉄製素環鏡板付轡・辻金具・方形革帯金具のセットが出土している。南棺の副葬品は、わずかに刀子1点のみであった。また墳丘外表遺物としては、墳頂部から円筒埴輪片が、墳裾からは須恵器の直口甌と坏身・坏蓋が出土した。東山10号窯式期（陶邑MT15号窯式併行期）の築造と考えられる。

10号墳

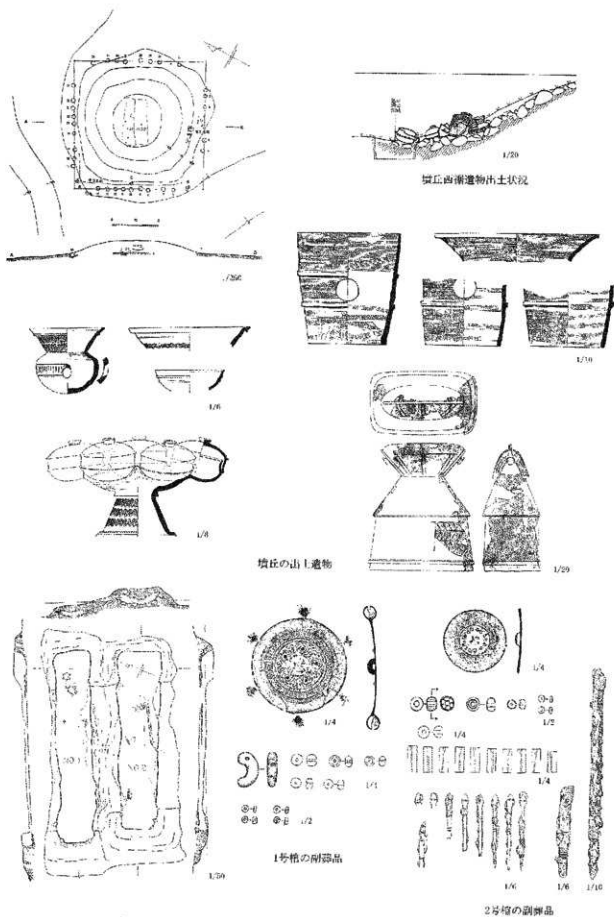
調査時には直径約7.5m程度、高さ0.5m程度の円墳であった。墳丘盛土中に炭化物のまじる粘土塊がみとめられたが、埋葬施設や副葬品など、明確な遺構や遺物は確認できなかった。墳丘の流失がいちじるしく遺存が劣悪であったものとおもわれる。

11号墳

直径12mの円墳であった。墳頂部では、長方形の平面プランをもつ粘土層と、その両端に赤色土の分布がみとめられたが、埋葬施設ではなく盛土築成の単位と報告されている。これらの盛土を表土下0.5m程度まで掘削すると礫を多く含む地山に到達したという。南と東南の墳裾にトレンチが開けられたが、周溝や葺石はみとめられなかった。結局、埋葬施設その他の遺構や遺物は一切検出されなかった。

12号墳

すでに墳丘中央東寄りを道路で切り崩されていたが、もと直径20m前後の円墳であったようである。葺石らしき礫を少量検出したと報告されているが、あまりに礫らで葺石とは判断しがたい。また埋葬施設などの遺構や遺物は一切みとめられなかった。



横丘西側遺物出土状況

横丘の山ノ遺物

1号棺の副葬品

2号棺の副葬品

第6図 松ヶ洞古墳群における既往の成果(1) 8号墳 【守山市教委1963】

13号墳

今回報告する古墳であるが、1963年にも発掘調査がおこなわれた。当時の調査では直径17.5m、高さ1.8mの円墳とされ、盗掘坑もみあたらず、保存状態はきわめて良好であったという。

墳丘には葦石が検出されたが、裾附近のみに葦石と当時は判断されたようである。葦石には地山層中の円礫のほか、「鬼板」とよばれる、土中の鉄分が硬化して周囲の砂礫をとりこみ岩石状になったものも使用していることが報告されている。また墳丘の築成は地山起源の土をほぼ水平に積み、中央のみさらに高く積み上げた想定された。埋葬施設の検出にはかなり苦慮したらしく、報告中に「ついに第4トレンチと第5トレンチの接続部において東西方向に埋葬された割竹形木棺の痕跡が発見された」との記述があり、それらしいものさえも平面的に確認することはできていない。「ベンガラで赤く塗った木棺を埋置した」との記述もみとめられる。この埋葬施設とされたところから副葬品の出土は一切なかった。遺物は、土師器片・器台が脚付用とおもわれる須恵器片が墳丘や墳裾から出土したにすぎなかった。円筒埴輪片が以前に表面採集されたというが、このときの発掘調査では入念に探したものの一点も発見できなかったという。

14号墳

直径約10m程度の円墳とみえたが、2000年の発掘調査により一辺約10mの方墳と確認された。四周に周溝がめぐり、西～南西側の墳丘中腹から須恵器の坏蓋と高坏が、また同様の位置の周溝内から須恵器の甕が出土した。葦石や埴輪はなかった。埋葬施設はみとめられず、墳丘盛土も0.6m程度しかなかったため、墳丘上部はすでに大きく削平・流失してしまったものと判断された。1963年～1965年の調査時に墳頂部で直刀が露出していたために緊急調査したとの一文【名古屋市教委1966】があることから、首肯できる状況であった。なおその緊急調査については内容、遺物の所在とも不明である。出土した須恵器により、東山11号窯式期（陶器TK47号窯型式併行期）の築造と考えられる。

15号墳

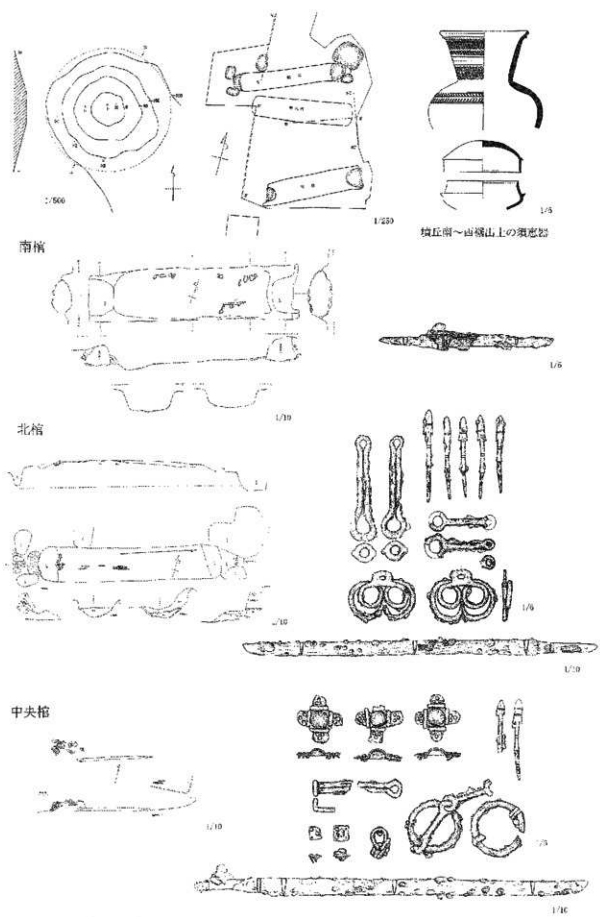
今回報告する古墳である。直径9m、高さ1mの円墳。

16号墳

直径10m、高さ1mの円墳。

以上が松ヶ洞古墳群における既往の調査成果である。これらによって松ヶ洞古墳群の内容は、古墳時代中期末から後期にかけての、木棺直葬など竖穴系埋葬施設をもつ、直径8～20m程度の円墳を主とする古墳群であることが知られる。また古墳群中には8号墳や14号墳のような方墳をふくむこと、葦石や埴輪をもつものがあること、須恵器を墳丘西面に据える例のあることなども知見にのぼった。

13号墳は当古墳群中最大規模の墳丘をもち、葦石を備えるが、副葬品は知られず、埋葬施設も粘土や石材を使用するような本格的なものではなかったようである。しかし松ヶ洞古墳群中では13号墳につぐ墳丘規模をもつ9号墳は、周溝・葦石ともにもたないが、埋葬施設の構造、副葬品とも当古墳群としては本格的で優秀である。いっぽうで8号墳は一辺8m程度の小方墳ながら、粘土槨を埋葬施設とし優れた副葬品をおさめ、かつ墳丘四辺を埴輪列が囲繞するという本格的なものであった。このように松ヶ洞古墳群では従来から指摘されているように、墳丘規模の大小、葦石の有無、埋葬施設構造の精粗、副葬品の多寡などが互いに一致せず、群中における階層差の把握が容易でないといえる。8号墳と14号墳の事例からは、こ



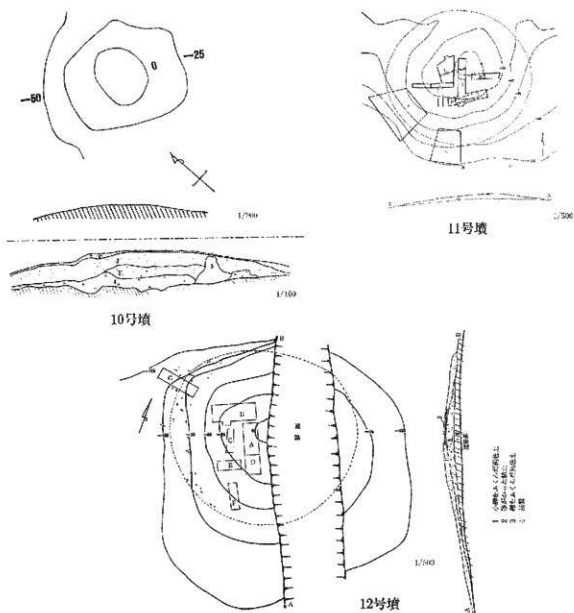
南塚

墳丘南～山腰山上の須恵器

北塚

中央塚

第7図 松ヶ河古墳群における既往の成果(2) 9号墳 【名古屋市教委1966】



第8図 松ヶ洞古墳群における既往の成果(3)—10～12号墳 【名古屋市教委1966】

うした古墳群中の差異が単純に墳形の違いに起因するものとも考えにくい。あわせて円墳と方墳が混在することの意味も考えなければならない。前報告【名古屋市教委1966】のように、「このような副葬品や埋葬施設の差異が、被葬者の身分・地位・勢力・富の差異を反映したものであることは異論のないところであろう」などと結論づけるのは早急に過ぎる。今後は古墳群の詳細構成、墓域形成などについて資料に即した分析と評価が必要である。

第二節 先行研究における松ヶ洞古墳群の評価

守山における一連の古墳調査以来、松ヶ洞古墳群を対象とした研究はなされていない。具体的な内容が比較的明らかで、尾張においては代表的な古墳群であるにもかかわらず、これまで積極的に触れられることがほとんどなかったのは、きわめて残念といわねばならない。

しかしながら、松ヶ洞古墳群にたいする従来の認識をするために、ある程度その評価や位置づけに触れた先行研究をうかがうとすれば、伊藤禎樹【1972】、犬塚康博【1998】をあげることになる。これらは、いずれも松ヶ洞古墳群そのものについて認識・評価の深化をねらって検討したものではないが、各時点での認識度、研究の進展をもっとも端的にあらわしているとおもわれる。

伊藤禎樹は、尾張の大型首長墳の築造動向により社会構造を検討するなかで、松ヶ洞古墳群について言及した。伊藤は、とくに方墳である松ヶ洞8号墳をあげて、近在の牛牧離レ松遺跡のような小方墳群ないし方形周溝墓群との関係を考えて。そして8号墳は「方形台状墓ともいべき古墳で」、「弥生時代からの墓域に方形周溝墓を引きつづいて営んだ人々の中から、おそらく次第に小型古墳を営む人々があらわれたと推定される」とし、さらに「松ヶ洞8号墳は方形周溝墓の後身で、時代の下るにしたがって方形周溝墓を営んだ人々は群集墳にも連なっていく」とのべた。

犬塚康博は、松ヶ洞古墳群において発掘調査された6基の古墳の成果から、古墳分布の空白部分を根拠に、「八・九号墳を盟主とする小集団と、一・三号墳を盟主とする小集団の、少なくともふたつの造営集団」の存在を想定した。また伊藤と同様に牛牧離レ松遺跡との関係に着目し、その小方墳群での墳裾の土器や埴輪の配置、墳形が方墳であること、地形を大きな目で見れば同じ谷にあるといった共通点をあげて、「松ヶ洞八号墳の出自は牛牧離レ松遺跡にあった」と断案した。さらに犬塚は名古屋市の古墳において墳丘に配置された須臾器に着目してこれを「葬祭具」と規定し、筒形器がないし甕をもちいる古墳と脚付多連坏をもちいる古墳とは、別系譜の葬送儀礼であると断じた。この前提にもとづき、松ヶ洞8号墳は両者をあわせもつから特殊であるとし、「出身集団からの断絶に成功したかの印象がある」と評価した。すなわち8号墳の存在意義を殊更に重要視し、松ヶ洞古墳群は「方墳群を契機にして」「木箱直葬の円墳群を形成し」と考えたのであった。それにたいし、牛牧離レ松遺跡が松ヶ洞古墳群と造営期間をほぼ同じくしながら、一貫して方墳群であることについて、後者は「相対的に均質な家族による造墓活動」で、前者はその「方墳を営む集団から一家族が抽出され、円墳群を造営する集団に編成替えされた、あるいは円墳群を造営する集団を編成した事象の存在を示唆」と結論づけたのであった。その「事象」の具体的な内容については、断夫山古墳の出現による「超大型前方後円墳一極小前方後円墳一円墳群中の方墳という三者の社会的連携」であるとのべ、6世紀中葉にいたって松ヶ洞古墳群は牛牧離レ松遺跡とともに川東山古墳群の造営へと推移して、近在の小幡茶臼山古墳や小幡古墳に総括されるとの考えをしめした。

いづれの考え方も、評価の具体性にやや差異はあるものの、基本的には同様の立場にある。とくに注目すべきは、両者とも牛牧離レ松遺跡を「方形周溝墓」とみて、その延長上に松ヶ洞古墳群を位置づけている点である。ただし未掘古墳を考慮にいれず8号墳を群中で唯一の方墳と断じ、それに依拠しての過大評価は適当でない。近年の新資料をあわせ、慎重に論ずべき課題である。ともあれこれらの先行研究からは近在の古墳との関係、葬制の問題、階層構成の問題など多方面の視点をよみとることが可能である。

第三章 松ヶ洞13号墳

第一節 調査の目的

松ヶ洞13号墳は民間個人の所有地であり、平成15年度、この場所で土地所有者を事業主とする集合住宅の建築が計画された。事業対象は墳丘本体をふくむ約1266㎡であり、松ヶ洞13号墳は完全に削平されるため、墳丘とその周辺をあわせて400㎡にたいして発掘調査を実施することとなった。

前章でのべたように、松ヶ洞13号墳はすでに昭和38年に発掘調査が実施されており、ある程度の考古学的情報が得られている。しかしながらもはや40年の年月を経て、既存の情報是不明確であり、また調査の内容も現代的な埋蔵文化財の調査研究の要求に堪えるものではなくなっている。松ヶ洞13号墳ではこのたびの完全消滅により今後の情報復元が不可能となることから、最後の機会として再調査をおこない、可能なかぎりの詳細情報を把握することを目的とした。



第9図 調査前の墳丘

第二節 調査区の設定と旧トレンチの清掃調査 (第10図～第14図)

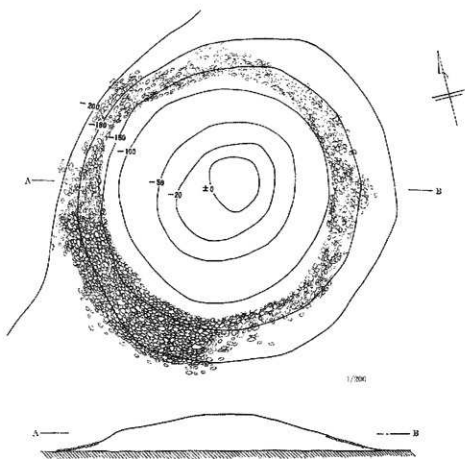
松ヶ洞13号墳は、昭和38年の発掘調査によるトレンチが、埋め戻しも不十分のままで陥没し、壁面は崩落した状態であった。旧トレンチは、ほぼ正しく南北軸とそれに直交する東西軸をもとに設定されたようである(第11図)。当時の報告によれば旧トレンチ間にはアゼ状の掘り残しが設けられたようだが、現状ではそうしたようすはうかがえず、すべて掘りぬいてつながれているようにおもわれた。

今次調査では、できるかぎり正確な断面観察を実現するために、旧トレンチを避ける位置で四方向にアゼを設定することとした。墳丘径の概測値から墳丘の中心点を決定し、そこから丘陵尾根筋を軸に東西方向のアゼ(C-E、C-W)を、またこれと直交する軸上に南北方向のアゼ(C-S、C-N)を、それぞれ設定した。さらに墳丘の残存状況と周溝の有無を確認するため、墳丘の南東側と北東側に小規模なアゼ(SE、NE)を設けた。

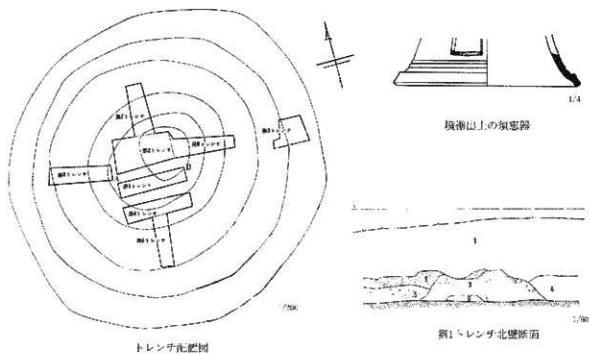
まずこれらのアゼを残し、それ以外の全面の表土を掘削して墳丘盛土面を検出することとした。掘削範囲は、周溝の存在する可能性を考慮し、墳丘周りを広めにとった。その後、旧トレンチ内についても各アゼを残しながら、旧トレンチ埋土を除去し旧トレンチの状態を確認した。旧トレンチ間のアゼは、すでに撤去されているかに当初はおもえたが、埋土を除去したところ、下半部については残存してい



第10図 樹木伐採後の墳丘



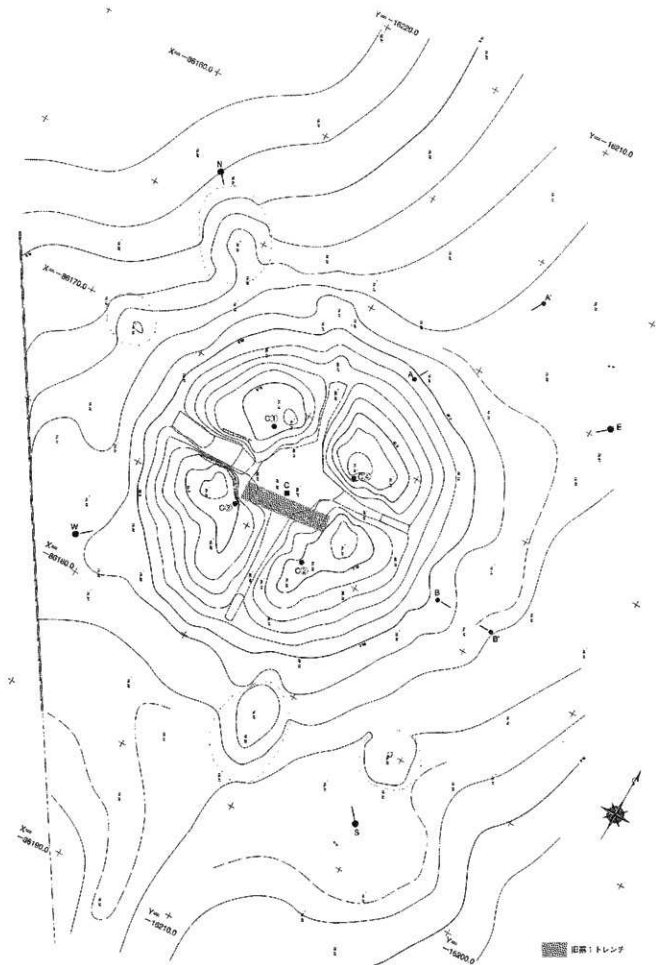
1963年発掘調査 埴正遺壘図



トレンザ配図

第1トレンザ北壁断面

第11図 1963年調査時の松ヶ洞13号埴 【名古屋市教委1966】



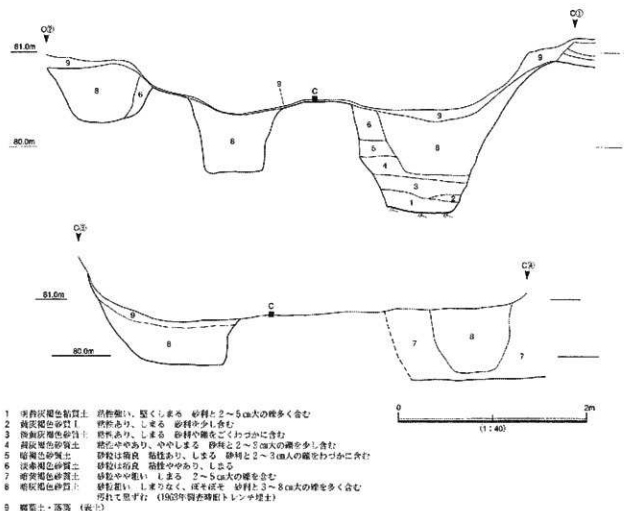
第12図 今回発掘調査前の墳丘測量図

た。そこで前報告の記述にしたがい、これら旧アゼの精査と断面観察をおこなったが、前報告と明確に一致する所見は得られなかった。とくに「第4トレンチと第5トレンチの接続部において東西方向に埋葬された割竹形木棺の痕跡が発見された」との記述に注目したが、この位置では痕跡はおろかそのように解釈しうる状況すらみとめられなかった。そのため上記引用文の内容は、前報告者が、すでに撤去され現在は無いアゼ上半部において確認した事実であるか、あるいは何かを誤認したものと判断された。



第13図 墳丘トレンチ開口状況

同様の要領で前報告の記述に注意しつつ、旧第1～旧第8トレンチまで断面精査をおこないながら埋土を除去し旧トレンチ底まで完削したが、古墳にともなう道物の出土はなく、前調査時以降に投棄されたとおもわれるゴミが少量混っていたにすぎなかった。また各旧トレンチの壁面もすでに崩落いちじるしく、大きく抉れており、積極的にはこのたびの調査の用に堪えない状況であった。したがって、今回設定したアゼ六本を残しながら、新たな調査を進めていくこととした。



第14図 墳頂旧トレンチ断面図

第三節 墳丘の調査（第15図～第26図）

まず各アゼの断面について写真撮影と図面作成をおこなった。そのうちすべてのアゼを撤去し、墳丘測量をおこなった。等高線は25cm間隔にとった。

墳丘には葦石があり、現状で面的に残存したのは墳丘下半のみであったが、墳頂部を除けば墳丘上半でも葦石とおもわれる石材が点々とみとめられることから、本来は墳頂部以外の全面に葦石が施されたと考えられる。このことは、今次調査時の墳丘の高さが、築造当時と比べてさほど削平されたものではないことを示唆するとおもわれる。墳丘南北の基底部には、墳丘外へ広がる平坦面【南張出部・北張出部】がみとめられ、上面には葦石を検出した（第15図）。定形をなさず舌状をている不規則な平面形、葦石のようすから、当初は自然地形ないし墳丘盛上の流土と、葦石の転落石の疑いもあった。しかしながらほぼ確実に転落石と判断できる石を除去したところ、平坦面にくいこみ、石間も噛み合う状態の原状をとどめる葦石を検出したため、これらの平坦面は墳丘の一部をなす張出部であると判断できた（第25・26図）。

墳丘周囲は、表土を除去すると、尾根筋では2～6cm大の礫を大量に含みやや隔ずんだ淡灰褐色粗砂が、両方の谷側では明赤色粘質精砂が、それぞれ露出した。いずれも地山であり、相対的に前者が上位の、後者が下位の地山を形成している。墳丘断削りの断面観察では、墳丘基底では先述した上位地山上がみとめられた。平面的には、尾根筋にはこの上位地山上が広がり、両方の谷側では斜面下方へ礫が小さく少なくなって、精砂へと漸移的に変化するようすが観察できた。したがって墳丘は、地山削り出しによる部分ほとんど皆無で、ほぼ全部が盛上によって構築されたことが明らかとなった。

墳丘盛上は、地山上層の小礫多混の粗砂と、地山下層の明赤色粘質精砂とに大別できる。土質と積み上げ単位の差異により、大きく二段階の盛上工程が想定できる。墳丘下半の盛土では色調が灰色ないし黄灰褐色の精砂や粘質砂礫土を中心とし、墳丘上半の盛土は、色調が灰黄褐色または灰橙色～灰赤褐色で、やや砂粒の粗い砂質土をおもにもちいている。下位の盛土を第1次盛土、上位を第2次盛土として、以下の記述をすすめる（第22図）。

第1次盛土 基底面から0.8m程度まで盛上をほぼ水平に積み上げ、上面を平坦にする。この平坦面をなす最上層【C-S13層・C-E18層】の下面には、暗赤色の鉄分が面的に沈着していた。この層は平面的



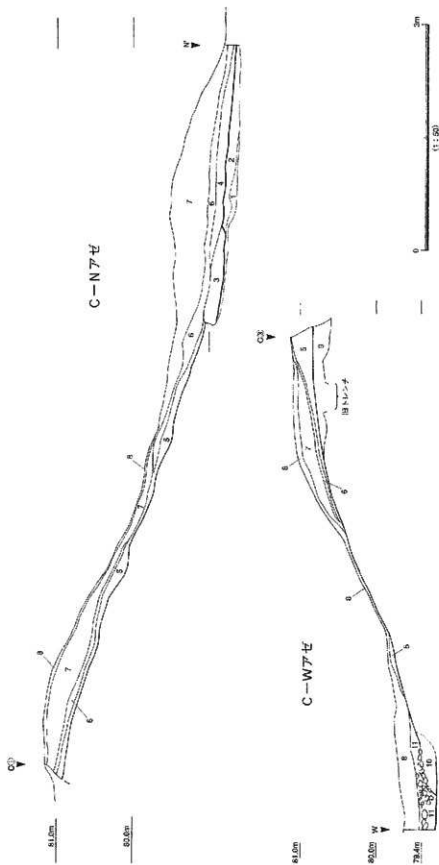
第15図 南張出部の葦石



第16図 西(CW)アゼ墳裾断面



第17図 墳丘東面の葦石



- 1 赤土層砂礫土 砂礫あり、よくしまる
- 2 赤土層砂礫土 赤土層あり、4層より厚みあり、砂礫あり、よくしまる
- 3 赤土層砂礫土 砂礫は比較的粗い、よくしまる
- 4 赤土層砂礫土 砂礫は比較的粗い、よくしまる
- 5 赤土層砂礫土 砂礫は比較的粗い、よくしまる
- 6 赤土層砂礫土 砂礫は比較的粗い、よくしまる
- 7 赤土層砂礫土 砂礫は比較的粗い、よくしまる
- 8 赤土層砂礫土 砂礫は比較的粗い、よくしまる
- 9 赤土層砂礫土 砂礫は比較的粗い、よくしまる
- 10 赤土層砂礫土 砂礫は比較的粗い、よくしまる
- 11 赤土層砂礫土 砂礫は比較的粗い、よくしまる

第18図 赤土除去阿 C-N、C-Wアゼ断面図

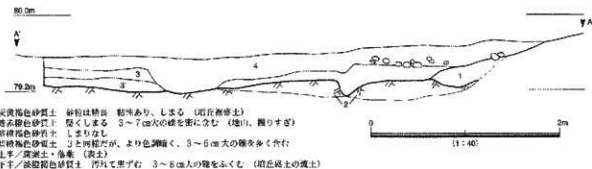
な広がり確認していないものの、二方向のトレンチと墳丘中央の旧トレンチ壁面のいずれにおいても確認できたため、この平坦面は作為的に造成されたものである。第1次盛土中、基底面から0.5mほどの位置までの盛土は、比較的薄く小単位の層での積み上げがなされたが、それよりも上位では厚く大きな単位の層が積まれている。小単位盛土の最上層【C-S11層・C-E13層】は、面的に広がる砂利層であるが、砂利間に空隙が多く密な噛み合いはみ



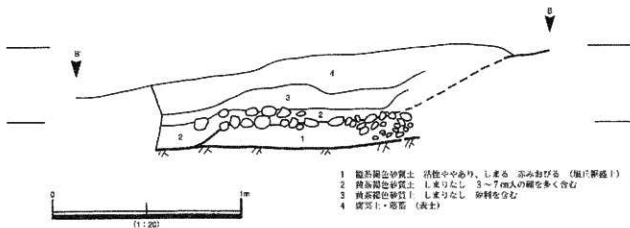
第19図 南(CS)アゼ 南張出部の断面

とめられず、やや黒ずんだ灰褐色の粗砂をまじえており、この面は墳丘築成過程のある一小工程単位であると考えられる。また南張出部の盛土は、第1次盛土下位の小工程の墳丘盛土と噛み合う関係にあり、当初から計画的に付設された施設と判明した。このように第1次盛土は、比較的薄くしまった盛土層のうえにやや厚い盛土で水平にかさ上げし、基壇状の墳丘を築く工程であった。

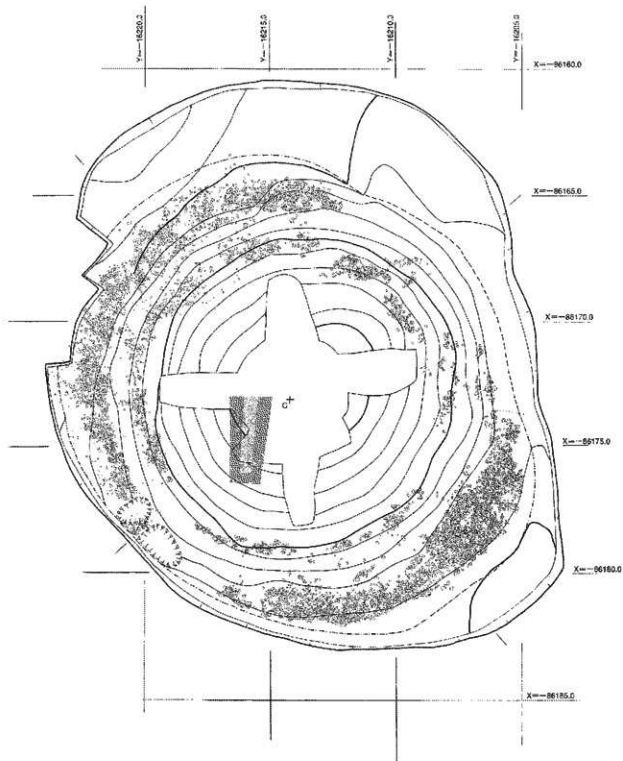
第2次盛土 第1次盛土の平坦面より上部に、厚く大きな単位の盛土を、墳丘中央から外側に向かって下がるように斜め積みする。このときまず墳丘中央部に土観頭状の盛土【C-S14層・C-E19~21層】を築き、これを上から大きくしていくように盛土が積まれたようである。



第20図 北東墳裾(NE)アゼ断面図



第21図 南東墳裾(SE)アゼ断面図



第23図 発掘調査後 墳丘測量図



第24図 墳丘NSライン上エレベーション図 (S=1:200 ただし、高さは2倍に強調)



第25圖 北溝出部 墓石平面圖 (S=1:50)



第26圖 南嶺山部 舞石平面図 (S=1:50)

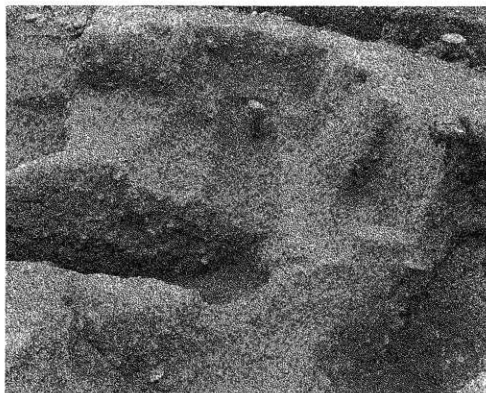
第四節 埋葬施設の調査（第27図～第29図）

墳頂部西側で、主軸方位を $N-6^{\circ}-E$ のほぼ南北にとり、木棺直葬の埋葬施設を検出した。前述のとおり、1966年調査により報告された埋葬施設の形跡は一切みとめられなかった。しかし旧第1トレンチを西に拡張しつつ調査したところ、その西壁面と南壁面にまたがる割竹形木棺の横断面形らしい土層を検出した。この埋葬施設は、前報告にある埋葬施設とは検出位置や主軸方位が異なることから、同一の木棺痕跡ではないと考えられる。なお北端部周辺は旧第1・2・4トレンチによりすでに破壊されていた。（藤井）

墓坑 墳丘構築後、盛土上面から掘り込んだ掘込墓坑である。北側の幅が広い長台形をていし、残存長が4.13m、掘り方上端での幅が南小口で1.32m、旧第1トレンチの南側で1.58mを測る。旧第2トレンチを挟んで北側の墳丘断面には墓坑が確認できなかったことから、本来の墓坑の上軸長は4.6m以下である。墓坑底面の幅は、旧第1トレンチの南側で1.02m、南小口で0.74mを測る。底面のレベルは、旧第1トレンチ北側が79.95m、南小口が79.88mで、北側のほうがわずかに高い。墓坑の深さは、旧第1トレンチ南側で約1.0m、南小口で約0.6mである。

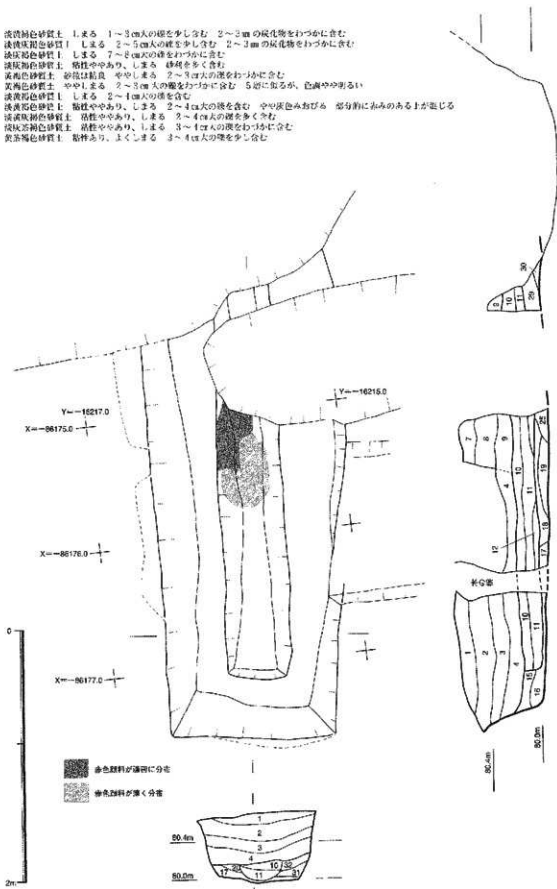
木棺 割竹形木棺は、墓坑底に置土【第28・29図17・24～26・29・30層】をほどこした上に納められている。木棺痕跡の規模は、残存長3.56m、幅が旧第1トレンチ南側で0.5m、南小口で0.53mを測る。本来の木棺の幅はもう少し広がったとおもわれる。棺底のレベルは、旧第1トレンチ北側が80.08m、南小口部分が79.97mで、北側のほうが0.1mほど高い。旧第1トレンチ南側の西寄りに赤色顔料の塗布がみとめられる。以上から、被葬者の埋葬頭位は北頭位と考えられる。副葬品は出土しなかった。（深谷）

盛土との関係 旧第1トレンチ壁面で墓坑と墳丘中央部の盛土の関係を検討した(第29図)。墓坑底のレベ



第27図 埋葬施設

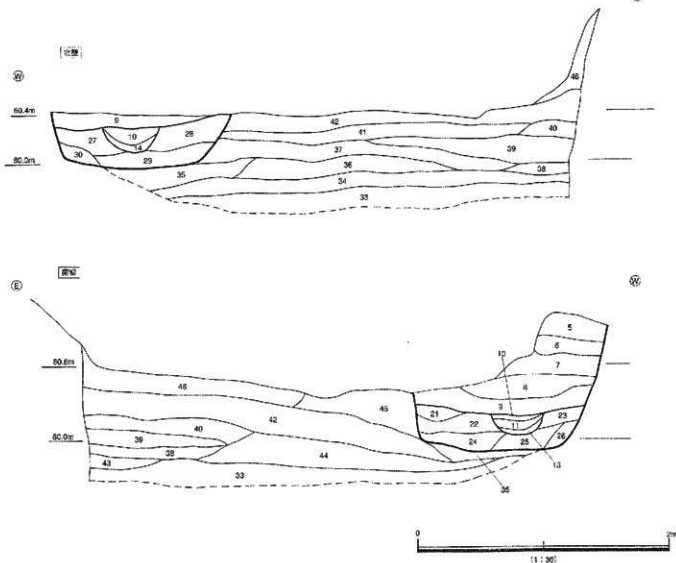
- 1 淡灰褐色砂質土 しまる 1～3cm大の礫を少し含む 2～3mmの炭化物をわずかに含む
- 2 淡灰褐色砂質土 しまる 2～5cm大の礫を少し含む 2～3mmの炭化物をわずかに含む
- 3 淡灰褐色砂質土 しまる 7～8cm大の礫をわずかに含む
- 4 淡灰褐色砂質土 粘性ややあり、しまる 砂粒を多く含む
- 5 黄褐色砂質土 砂粒は粗良 ややしまる 2～3cm大の礫をわずかに含む
- 6 黄褐色砂質土 ややしまる 2～3cm大の礫をわずかに含む 5層に異なるが、色調やや明るい
- 7 淡灰褐色砂質土 しまる 2～4cm大の礫を含む
- 8 淡灰褐色砂質土 粘性ややあり、しまる 2～4cm大の礫を含む やや灰色みおびぬ 部分前におみのある上が混じる
- 9 淡灰褐色砂質土 粘性ややあり、しまる 2～4cm大の礫を多く含む
- 10 淡灰褐色砂質土 粘性ややあり、しまる 3～4cm大の礫をわずかに含む
- 11 黄赤褐色砂質土 粘性あり、よくしまる 3～4cm大の礫を少し含む



第28図 埋葬施設 平面図・断面図

ルは、墳丘第1次盛土の上部平坦面とほぼ一致した。また南北両壁面での土層の続きぐあいからは、墓坑が切り込む部分の盛土は中央から周縁に向かって斜め積みされ、墓坑底以下の盛土層はほぼ水平に積まれているようであった。そのため墓坑状をなす第1次墳丘盛土は、当初より墓坑底の位置をほぼこの面に設定することを企図して構築されたとおもわれる。第2次墳丘盛土を斜め積みで厚く構築する方法も、盛土後に一定の深さの墓坑を削り込む余地を確保する意図も含まれていた可能性がある。(藤井)

(E)



- 12 黄褐色砂質土 粘粒あり、しまる プラザラする やや灰赤みおびる 13 淡赤褐色粘土 粘性中やあり、よくしまる 2~3cm大の礫をわづかに含む
 14 灰赤褐色粘土 2層と同一だが、2~3cm大の灰白色粘土ブロックを少し含む 15 灰赤褐色粘土 粘粒中やあり、よくしまる
 16 灰褐色粘土 粘性中やあり、よくしまる 2~3cm大の礫をわづかに含む やや灰赤みおびる 17 灰褐色粘土 粘粒中やあり、よくしまる 1cm大以下の礫をわづかに含む 灰分低減する 18 黄褐色粘土 粘粒中やあり、よくしまる 2~3cm大の礫をわづかに含む やや赤みおびる 19 灰赤褐色粘土 粘粒中やあり、よくしまる 2cm大の礫と砂粒をわづかに含む 19a 粘赤褐色粘土 粘粒中やあり、よくしまる 2~3cm大の礫をわづかに含む 灰分低減と灰化物を少し含む 20 淡赤褐色粘土 粘粒中やあり、よくしまる やや赤みおびる 砂粒をわづかに含む 21 黄褐色粘土 粘性中やあり、よくしまる 1~2cm大の礫を少し含む 砂粒を含む 22 黄褐色粘土 粘粒中やあり、よくしまる 2~3cm大の礫を少し含む 砂粒を含む 23 明黄褐色粘土 粘性中やあり、しまる 2~3cm大の礫をわづかに含む 灰分低減と灰化物を少し含む 24 淡赤褐色粘土 しまる 2~3cm大の礫をわづかに含む 赤みを多く含む 25 明黄褐色粘土 粘性中やあり、よくしまる 1~5cm大の礫を少し含む 砂粒を多く含む 26 黄褐色粘土 粘性中やあり、よくしまる 2~3cm大の礫をわづかに含む 灰化物と砂粒を含む やや灰赤みおびる 27 淡赤褐色粘土 よくしまる 3cm大の礫を多く含む 28 淡赤褐色粘土 粘粒中やあり、よくしまる 2~3cm大の礫をわづかに含む 砂粒を多く含む やや赤みおびる 29 淡赤褐色粘土 粘性中やあり、よくしまる 砂粒をわづかに含む やや赤みおびる 30 淡赤褐色粘土 粘性中やあり、よくしまる 砂粒をわづかに含む 31 明黄褐色粘土 粘性中やあり、よくしまる 1~2cm大の礫をわづかに含む 灰化物と灰化物を少し含む 32 黄褐色粘土 粘性中やあり、しまる 砂粒をわづかに含む 33 暗褐色粘土 粘性あり、しまる 3~4cm大の礫をわづかに含む 赤みを多く含む 34 暗褐色粘土 粘性あり、しまる 4cm大の礫をわづかに含む 35 灰赤褐色粘土 砂粒は粘粒 粘粒なし、しまる 4cm大の礫をわづかに含む 37 灰褐色粘土 砂粒は粘粒 粘性なし、よくしまる 3~4cm大の礫を少し含む 38 暗褐色粘土 粘性あり、しまる 2cm大の礫を多く含む 灰分の比が物を多く含む 39 淡赤褐色粘土 粘性なし、よくしまる 1~2cm大の礫を多く含む やや赤みおびる 40 黄褐色粘土 粘性中やあり、中やしまる 砂粒を少し含む 41 暗褐色粘土 粘性なし、しまるしまる 砂粒を少し含む 42 明黄褐色粘土 粘性なし、しまるしまる 砂粒を多く含む 43 暗赤褐色粘土 粘性中やあり、よくしまる 3cm大の礫を多く含む 灰赤み 44 灰褐色粘土 砂粒は粘粒 粘性なし、しまる 45 灰赤褐色粘土 粘性なし、しまる 3~4cm大の礫を多く含む 46 淡赤褐色粘土 粘性なし、しまるしまる 砂粒をわづかに含む

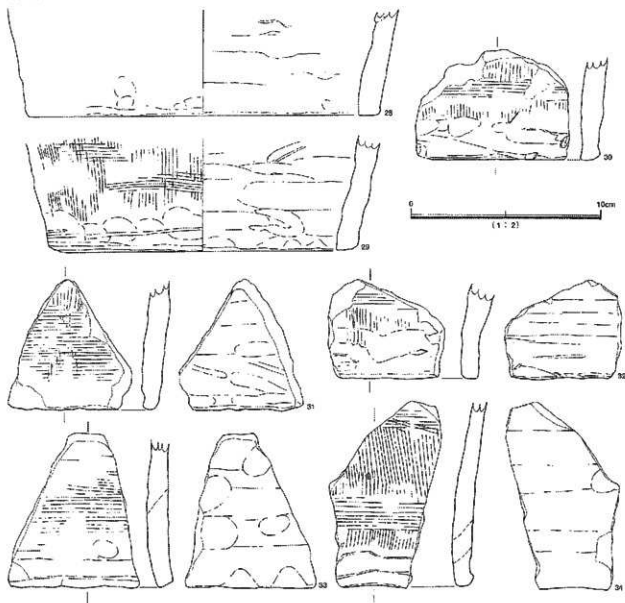
第29図 旧第1トレンチ断面図

第五節 出土遺物 (第30図～第32図)

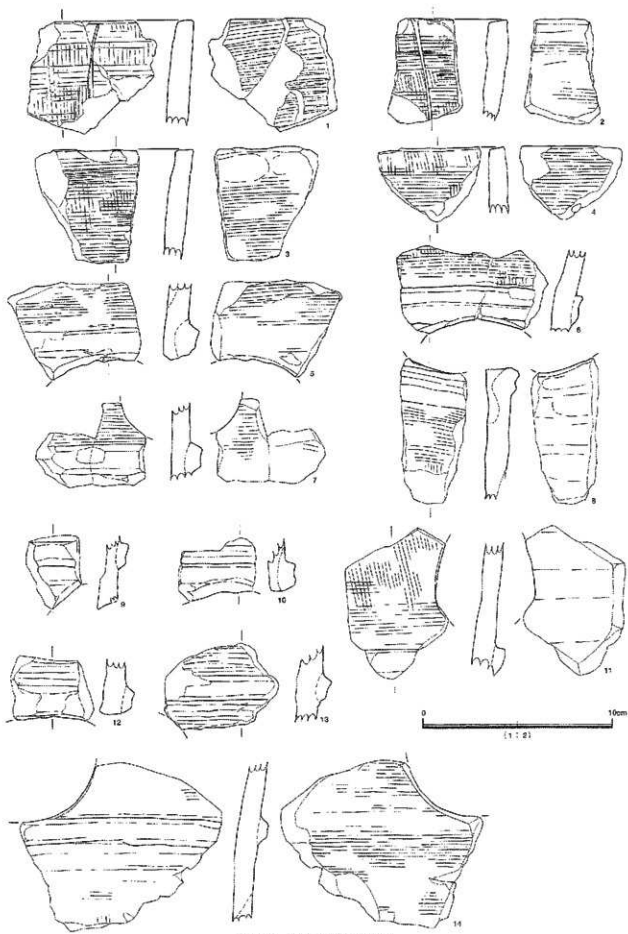
遺物は、埋葬施設からのものは皆無で、墳裾から出土した埴輪片と土師器片、須恵器片のみにとどまる。

埴輪は円筒埴輪である。すべて小破片で接合するものはなく、個体数は不明である。墳丘から離れた木調査区へ流失した破片も少なくないとおもわれるものの、得られた破片の数や出土位置の偏りからして、せいぜい1～3個体程度で、樹立された位置・数は、到底墳丘を圍繞するものではなかったと考えられる。

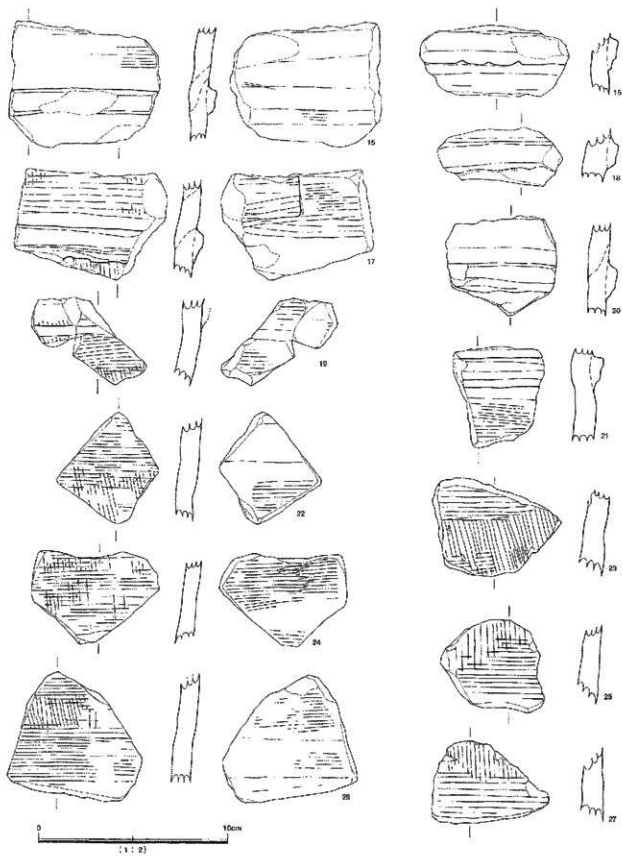
いわゆる尾張型埴輪である。色調は淡黄色で、胎土は砂粒が比較的粗く脆いものである。焼成は窯窯焼成である。外面調整は一次調整タテハケ後、二次調整回転（C種）ヨコハケである。突帯は断面形がごく扁平なM字形である。口縁はほぼ直立し、端面を面取りしている。口縁付近にヘラ記号をもつものもある（第31図1・2）。器形はおそらく二条三段で、おおむね底部から口縁へむかって直線的にやや開く直立の形態である。尾張型埴輪第2段階、築込窯産須恵器では東山11号窯式期（陶邑TK23～TK47号窯式併行期）に相当する。



第30図 円筒埴輪実測図(1)



第31图 円筒冠輪美測图(2)



第32圖 円筒槍尖測圖(3)

小結

約40年前に発掘調査がおこなわれた古墳の再調査であった。13号墳では、墳丘の築成状況についてより詳細な記録を得ることができた。また前報告にあった埴石や墳形についても状況や形態、性格などを確認することができ、そのなかで張出部の存在や埋葬施設の検出など、新たな成果もあげることができた。それにより明らかとなった13号墳の要点は下記のとおりである。

- ① 直径約17mの円墳で、墳丘南北に埴石のある張出部がつく。張出部を含めて墳長約20mである。
- ② 墳丘築成にあたり、水平積みの第1次盛土と、中央から周縁へと斜め積みする第2次盛土との、2段階の盛土工法の存在が推定できた。
- ③ 埋葬施設は南北に軸をとる、掘込墓坑の割竹形木棺直葬で、棺内の北寄りには赤色顔料がまかれていた。1963年調査に確認したという東西軸の割竹形木棺直葬は、その存在は今回確認できなかった。
- ④ 周溝はない。墳丘西裾から北西裾にかけて、円筒埴輪片が多数出土したが、個体数としては2～3個体程度である。ほかの位置ではいっさい出土しないことから、墳丘西斜面ないし西裾に円筒埴輪が敷えられたと考えられる。
- ⑤ 墳丘斜面より土師器片が出土した。墳丘上祭祀にもちいたものかもしれない。器種器形は不明。
- ⑥ 築造時期は、円筒埴輪から、東山11号窯式期（陶器TK23～TK47号窯型式併行期）である。

古墳に直接関係しない時期については、墳丘の南張出部上の転落埴石を除去中に、転落石の間隙より灰釉陶器片が3点出土した。本墳の場合、墳丘上や墳丘裾に1963年調査時の排土山が残されており、こうした排土山よりの流出である可能性が必ずしも排除できないが、古代に本墳の場所で、何らかの人間活動があったかもしれない。

松ヶ洞古墳群のような内容豊富で、学史上にも著名な古墳群が開発のために消滅していくのは非常に残念なことである。しかしそれは開発行為に限ったことではない。今回の調査着手前に、約40年前の発掘調査のトレンチが完全に埋められずに開口し、墳丘上に排土山の残された、無残な古墳の姿は、埋蔵文化財の考古学的調査もまた一種の遺跡の破壊行為であることをあらためて痛感せざるをえなかった。短慮な感想かもしれないが、埋蔵文化財の発掘調査を実施するにあたり、調査の目的と方法・内容、保存・保全対策、活用など埋蔵文化財にたいするさまざまな事前・事後の世話が充分に用意される必要を身をもって知る調査であった。

第四章 松ヶ洞15号墳

第一節 調査の経過と目的

松ヶ洞15号墳は民間個人の所有地で、平成15年度末に、この場所で土地所有者を事業主とする集合住宅建築を計画する旨届出があった。この開発により松ヶ洞15号墳は完全に削平されるため、事前に発掘調査を実施することとなった。

松ヶ洞15号墳は、昭和38～40年の松ヶ洞古墳群発掘調査の際に調査対象となっておらず、考古学的情報が皆無であった。調査前の現地は、雑木の山林内で、落葉と腐葉土、敷土が厚く堆積していたが、直径6m前後の小円墳とみえる状況であった。墳頂部に小規模な盗掘坑らしき擾乱があることと、墳丘上部の盛土がいくらか流出していることが予想される程度で、総じて残存状況は良好とおもわれた。

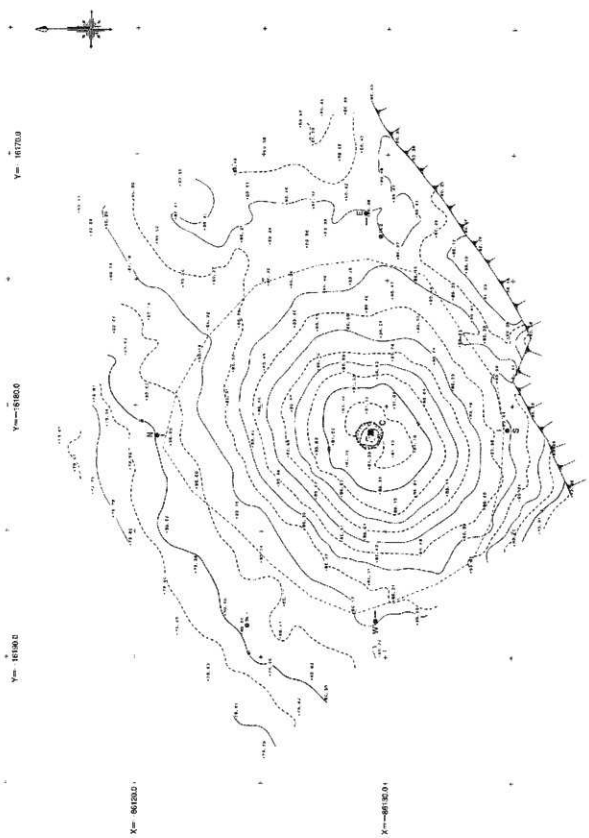
第二節 調査区の設定 (第34回)

発掘調査前、現地の状況は、東西方向に丘陵尾根筋がはしり、南北へ斜面が下降していた。北側は墳裾から漸次下降し、直下をとおりる道路によって開削されて高い崖となり、擁壁がほどこされている。南側は墳裾付近で土地がすでに切り崩され、高さ2m程度の崖となっている。西側は墳裾付近が尾根の小鞍部で、隣地との境界でもあった。いっぽう東側は丘陵尾根筋で平地が比較的広くひらけており、また今回の開発事業の対象範囲であるため調査の手を延ばすことが可能な状況であった。



第33回 表土除去作業風景

このような地形条件と土地所有者の境界とによって、墳裾外側については、本格的な掘削が可能なのは北西から南東へかけてと制約された。まず見た目上の墳丘中心をおおよそ計測し、この中心点(C点)をとるように墳丘の敷北-南ラインで主軸を設定した。また同様に、墳丘中心をとおって南北軸ラインに直交する東西軸ラインを設けた。これらの南北軸・東西軸に沿って幅約0.3mのアゼを残し(C-N、C-S、C-E、C-W)、墳丘外までこのアゼを延長することで調査区を設定した。とくに墳丘東側は、想定される墳丘直径に比して墳裾がやや裾広がりであるようすがみとめられたため、その性格を検討するために、東西軸アゼは墳裾の外側まで延長して、東側を長くとした。こうして4つの区画を設定し、それぞれ北西区、北東区、南西区、南東区とした。表土を除去し、アゼの記録作業と墳丘測量を終えたのち、C-NアゼとC-Eアゼに沿って墳丘断割りのトレンチを掘削した(T1・T2)。また北東の掘出部から墳裾にかけてと、C点から墳丘北西方向にも断割りトレンチを掘削した(T3・T4)。



第34圖 乳樹嶺前 峰丘測圖 (S = 1 : 150)

第三節 墳丘の調査（第35図～第41図）

墳丘については4区画を同時に、墳裾とその周辺については北西区から北東区、南東区へと順に、表土を掘削していった。地山は暗黄褐色の砂礫土であった。墳丘は比較的精良な黄褐色ないし黄棕色の砂質土で、粘性はなかった。

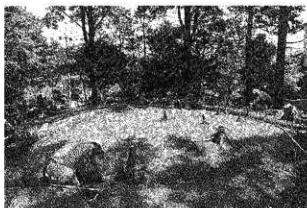
北東区の墳裾まわりでは表土掘削後に、地山とは明らかに異なる黒ずんだ黄褐色砂土からなる周溝のプランを検出した（第36図）。北西区では、樹木の根が多かった影響と数日前の雨水で地山が荒れていたため、周溝プランを見落としすでに掘りすぎてしまっていた。

しかし再度の検出作業により、底面附近のみではあるが北西区でも周溝プランを確認できた。周溝は、西は北西区半ばで、東は南東区のC-Eアゼぎわで収束しており、全周はしない。西～北西にかけての周溝埋土中から、履輪片と土師器片が出土した。北の周溝埋土中にも少量の埴輪片を含んでいたが、それ以外の位置からは遺物は一切出土しなかった。

北東区では、おおきく外へ張り出した墳裾が、自然地形ではなく、土の特徴からは墳丘盛土と同一のものと考えられた。あるいは墳丘盛土上の流上かとも疑ったが、張出部をなす土層は比較的均一でしまりのよい土からなり、流上とも考えにくいものであった。はたしてこの張出部に沿ってめぐる周溝を検出したため、墳丘の一部として人為的な盛上によって作られた張出部と判明した。墳丘全体にわたり葺石は存在しなかった。周辺に石材の流出もみとめられず、元来15号墳には葺石がほどこされなかったと考えられる。アゼは記録作業後に撤去し、墳丘測量をおこなった。等高線は25cm間隔でとった。その結果、墳丘は墳長12mで、張出部と周溝をもつ円墳であった。円丘部は直径10m、高さ1m、張出部は長さ約2.6m、高さ約0.4mである（第41図）。

墳丘盛土は、T1・T4の断面では、墳丘の下半を水平に積み上げ、上半を墳丘中央から周縁に向かって下がる斜め積みとする盛土単位が確認できた（第39・40図）。盛土はしまるが粘性の弱い精砂を基本とするが、墳丘上位では明黄褐色～茶褐色、または赤褐色の色調の土を中心とし、墳丘下位はおもに暗黄褐色～暗茶褐色の色調の土であった。

いっぽうで南北軸上のT2の断面では、墳丘周縁側に断面山状の盛土をはっきりと確認できた（第39図）。他の土割り断面では確認できないことから、平面形態は臑状ではなく、土饅頭状になると推測できる。この土饅頭状盛土は、小礫をまじえるが砂粒が細かく粘性のある、よくしまる土層からなり、色調は黄褐色を基調とする。土饅頭よりも墳丘内側の盛土は、基底地山面から0.4m程度まで水平に積み、そこか



第35図 墳丘検出作業風景



第36図 周溝平面プラン検出状況

ら上位は墳丘中央から土饅頭状盛上へ向かって斜め積みしていた。

このように15号墳は、土饅頭状の盛土法と、水平・斜め積みの盛土法との二種の盛土法を併用した、やや複雑な墳丘盛土工法により構築されている。本調査での状況からは、土饅頭状の盛土はごく部分的で、大半は水平・斜め積みの盛土法により構築されたとおもわれる。

墳裾のT3以外のどの断割り断面においても、盛土法にかかわらず、しまりのある地山起源の砂礫土を、地山面から0.2~0.3m程度まで水平に積んでいるのが確認でき、墳丘基底面の整地がおこなわれたと考えられる【第39・40図1~3層】。この整地層を基底として、二種の盛土法が、工程上の先後関係としては土饅頭が先、水平・斜め積みが後にほどこされた。

まず墳丘構築範囲周縁の一部に、底径3.4m、基底整地層上面からの高さ0.6mほどの土饅頭状盛土を築き【第1次盛土】、その内側を基底整地層上面から

0.4m程度の高さまで盛土をほぼ水平に積み上げている【第2次盛土】。その上面はほぼ平坦である。この平坦面をなす最上層は、砂利主体層【第39図13層・第40図7層】が墳丘中央から土饅頭状盛上の内側斜面まで積まれている。この砂利主体層は墳丘東軸のT1ではみとめられない。T1・T3断面によれば、墳丘北東面の張出部はこの第2次盛土の段階で併行して構築されており、自然地形や墳丘流土ではなく、墳丘の一部として付設されたものと確認できる。T1のT2との接続部の奥壁面やT2西壁面では、部分的に濃密な焼土がみとめられ、赤く発色していた(第39図9・11層)。レベルとしては同様の位置であり、水平積み盛土の上端面にあたる。この面で火をもちいる何らかの行為がおこなわれた可能性がある。墳裾では、墳丘の南東から西面をめぐる周溝が掘削された。

T1とT4では同様に水平積みの第2次盛土を観察することができるが、断面の土層の比較からは、T1ではT2・T4で確認できた砂利主体層がみとめられず、また第2次盛土後の斜め積み【第3次盛土】の盛土の意識もあまり積極的のうかがうことができない。こうしたことから墳丘東面から南東面については、他とは墳丘盛土の作業単位が異なっていた可能性がある。



第37図 T1南壁面



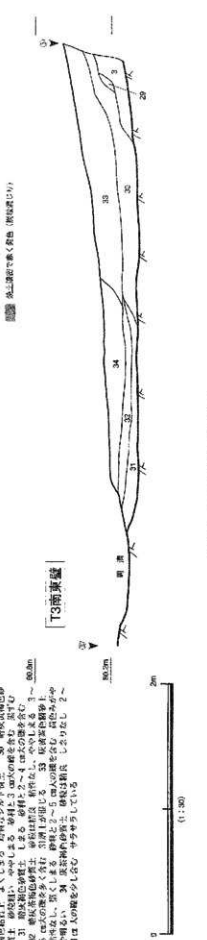
第38図 T1奥壁面で検出した焼土



1 赤褐色砂岩 1 赤褐色砂岩 2 赤褐色砂岩 3 赤褐色砂岩 4 赤褐色砂岩 5 赤褐色砂岩 6 赤褐色砂岩 7 赤褐色砂岩 8 赤褐色砂岩 9 赤褐色砂岩 10 赤褐色砂岩 11 赤褐色砂岩 12 赤褐色砂岩 13 赤褐色砂岩 14 赤褐色砂岩 15 赤褐色砂岩 16 赤褐色砂岩 17 赤褐色砂岩 18 赤褐色砂岩 19 赤褐色砂岩 20 赤褐色砂岩 21 赤褐色砂岩 22 赤褐色砂岩 23 赤褐色砂岩 24 赤褐色砂岩 25 赤褐色砂岩 26 赤褐色砂岩 27 赤褐色砂岩 28 赤褐色砂岩



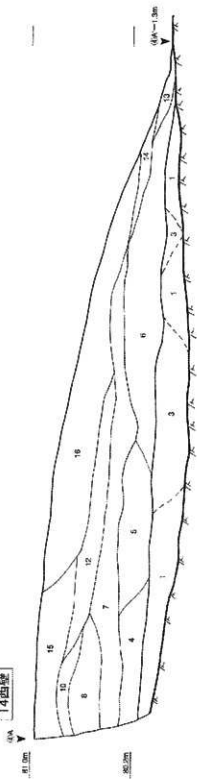
1 赤褐色砂岩 1 赤褐色砂岩 2 赤褐色砂岩 3 赤褐色砂岩 4 赤褐色砂岩 5 赤褐色砂岩 6 赤褐色砂岩 7 赤褐色砂岩 8 赤褐色砂岩 9 赤褐色砂岩 10 赤褐色砂岩 11 赤褐色砂岩 12 赤褐色砂岩 13 赤褐色砂岩 14 赤褐色砂岩 15 赤褐色砂岩 16 赤褐色砂岩 17 赤褐色砂岩 18 赤褐色砂岩 19 赤褐色砂岩 20 赤褐色砂岩 21 赤褐色砂岩 22 赤褐色砂岩 23 赤褐色砂岩 24 赤褐色砂岩 25 赤褐色砂岩 26 赤褐色砂岩 27 赤褐色砂岩 28 赤褐色砂岩



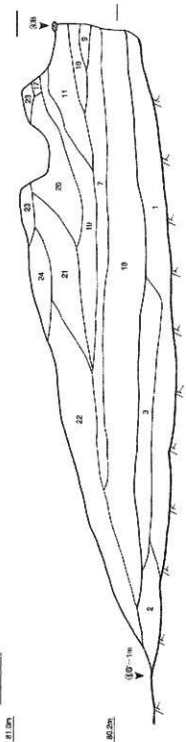
1 赤褐色砂岩 1 赤褐色砂岩 2 赤褐色砂岩 3 赤褐色砂岩 4 赤褐色砂岩 5 赤褐色砂岩 6 赤褐色砂岩 7 赤褐色砂岩 8 赤褐色砂岩 9 赤褐色砂岩 10 赤褐色砂岩 11 赤褐色砂岩 12 赤褐色砂岩 13 赤褐色砂岩 14 赤褐色砂岩 15 赤褐色砂岩 16 赤褐色砂岩 17 赤褐色砂岩 18 赤褐色砂岩 19 赤褐色砂岩 20 赤褐色砂岩 21 赤褐色砂岩 22 赤褐色砂岩 23 赤褐色砂岩 24 赤褐色砂岩 25 赤褐色砂岩 26 赤褐色砂岩 27 赤褐色砂岩 28 赤褐色砂岩 29 赤褐色砂岩 30 赤褐色砂岩 31 赤褐色砂岩 32 赤褐色砂岩 33 赤褐色砂岩 34 赤褐色砂岩

第39図 横丘断割り断面図(1)

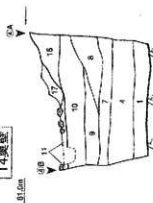
T4西壁



T4東壁

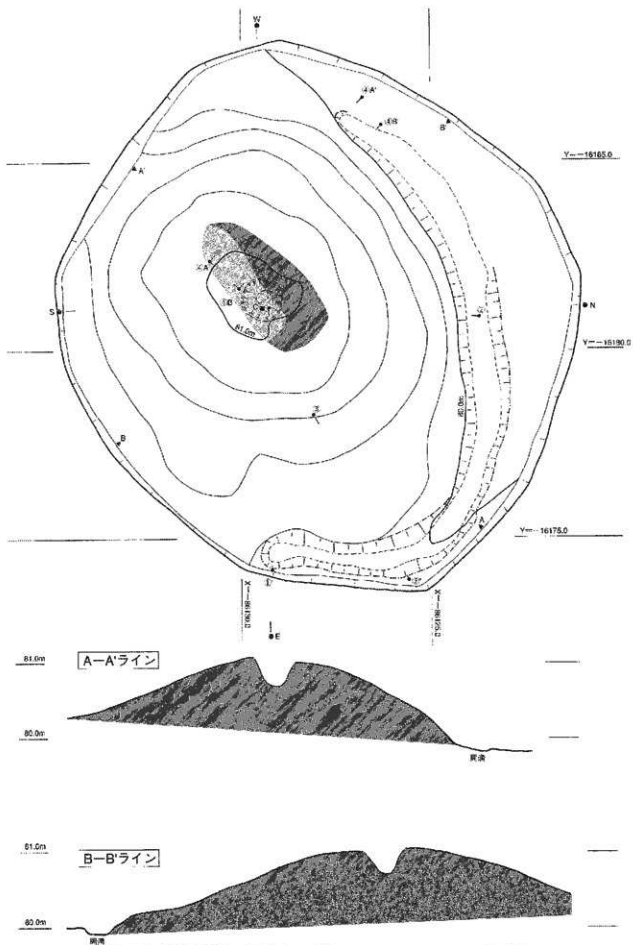


T4東壁



1 赤土の礎石。上は赤土の礎石を敷き居る(掘削区画は?)。2 灰泥の礎石。3 灰土の礎石。4 赤土の礎石。5 赤土の礎石。6 赤土の礎石。7 赤土の礎石。8 赤土の礎石。9 赤土の礎石。10 赤土の礎石。11 赤土の礎石。12 赤土の礎石。13 赤土の礎石。14 赤土の礎石。15 赤土の礎石。16 赤土の礎石。17 赤土の礎石。18 赤土の礎石。19 赤土の礎石。20 赤土の礎石。21 赤土の礎石。22 赤土の礎石。23 赤土の礎石。24 赤土の礎石。25 赤土の礎石。26 赤土の礎石。27 赤土の礎石。28 赤土の礎石。29 赤土の礎石。30 赤土の礎石。31 赤土の礎石。32 赤土の礎石。33 赤土の礎石。34 赤土の礎石。

第40図 埴丘新掘り断面図(2)



第41図 横丘測量図とエlevation図 (S = 1 : 100、ただし高さ は 2 倍に強調)

第四節 埋葬施設の調査（第42図～第44図）

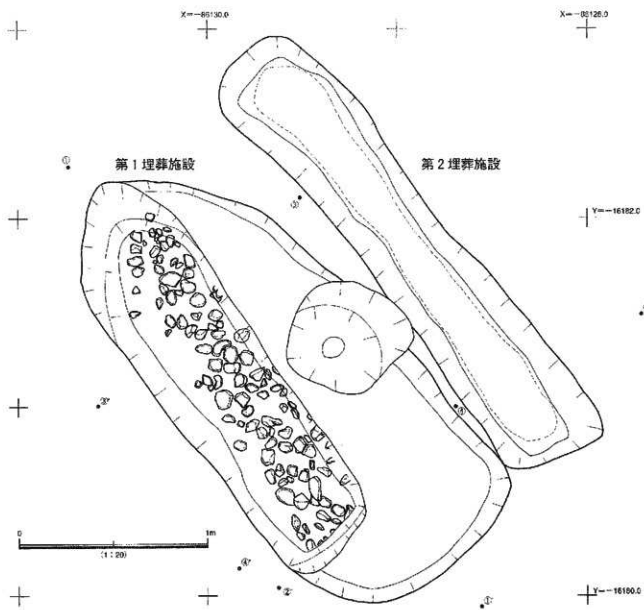
墳頂部で、主軸方位を南西-北東にとり並列する2基の埋葬施設を検出した。墳頂部には調査前から小規模な攪乱坑がみとめられたが、結果的にこの攪乱坑は2基の埋葬施設の中間部分を破壊するにとどまっておらず、あまり大きな影響はなかった。

まず墳頂部を精査したところ、砂粒の比較的精良な黄赤色砂質土の範圍を検出した。平面プランを明確に線引きすることは困難であったが、明らかに墳丘盛土と比べて柔らかくしよりの弱い、また礫石をほとんど混じえない土であり、土質の異なる何らかの単位が存在するとおもわれた。しかし結局これは墓坑プランとはならず、この上の下から第1埋葬施設の被覆上面と第2埋葬施設を検出したため、この土は埋葬施設周辺を最終的に被覆した墳丘盛土と考えられた。

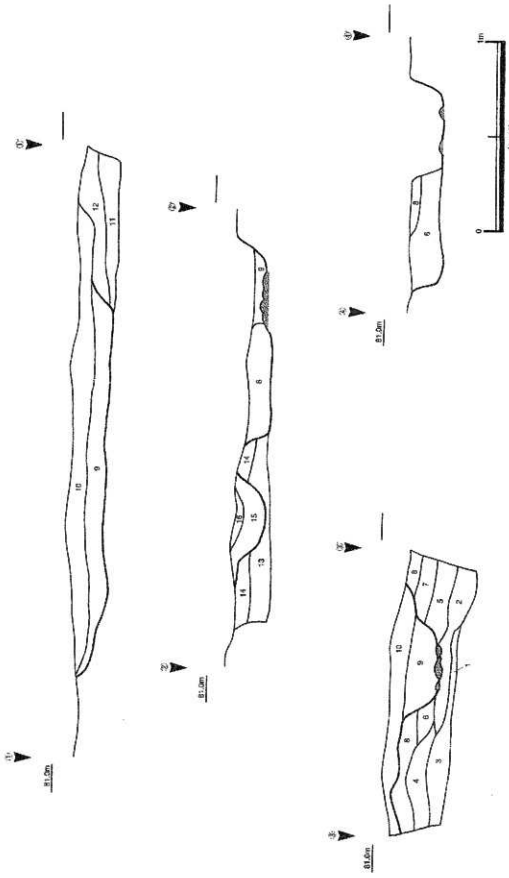
第1埋葬施設 上述の墳丘盛土を除去後、きわめて精良な砂粒の明赤色砂質土が現れ、そのほぼ中央周辺には直径5～8cm大の円礫を多量にふくむ混礫土【第43図10層】がひろがっていた。混礫土周辺では明赤色砂質土のなかに墓坑平面プランを検出したため、この混礫土は木棺上部の被覆土と考えられる。墓坑平面プランは、東小口側は直線的だが西小口側が船先状にすぼまり、長さ2.74m、東小口幅1.05mである。さらにこの墓坑内の南側に寄せた木棺痕の平面プランを検出した。棺は長さ約2.3m、幅約0.6mの舟形木棺と考えられる。木棺の横断面形は上にやや開く逆台形である。墓坑底のレベルは80.7mでおおむね揃い平坦である。底面には5cm大の礫を平坦な面を上に向けて敷いていた。この礫は木棺痕の肩の壁や上部におよぶような位置でもみとめられ、一部の礫は木棺肩部にまでほどこされたようである。これらから当埋葬施設の構造は、簡易な礫塚状施設をもつ木棺直葬といえる。なお埋葬施設に直接およぶ攪乱はなく未盜掘であったが、副葬品は皆無であった。

第1埋葬施設の墓坑 第1埋葬施設を縦横に断ち割ったところ、北側辺と東小口の墓坑肩をなす十層【5～8・11・12層】の下面から、底面礫敷の続きを検出した。すなわちこれら墓坑肩の土層は、底面の礫敷がほどこされた後に盛られたものである。またこの十層には明確に掘り込んだような掘り方がなく、そのまま墳丘盛土の一部をなしている（第39図T1南壁・第40図）。南側辺肩部の土層でも同様の状況であった。したがって第1埋葬施設の墓坑は、構築墓坑である可能性が高い。

第2埋葬施設 第1埋葬施設の北側に平行して、第2埋葬施設を検出した。第2埋葬施設は木棺直葬で、平面形と断面形から、長さ約1.9m、幅約0.45mの筒形木棺と考えられる。棺床・墓坑は平面プランが第1埋葬施設墓坑の北側肩をなす墳丘盛土【第40図23層・第43図14層】を切っており、断面観察でも掘り方を確認できることから、第1埋葬施設の後掘り込まれた掘込墓坑である。第1埋葬施設と同じく、やはり埋葬施設の攪乱はなく未盜掘であったが、副葬品は皆無であった。棺床部分から肩にかけて、きわめて精良な砂粒の明赤色砂質土が敷かれていた。この明赤色砂質土は、東小口側においてピンク色がかった鮮明な赤色で、中央から西小口側にかけては土の発色の差ともとれるやや鈍い色調であった。はたして調査後の蛍光X線分析により、東小口側のサンプル土中からは水銀朱が検出され、西小口側のサンプル土では検出できなかった（詳細は第五章を参照）。

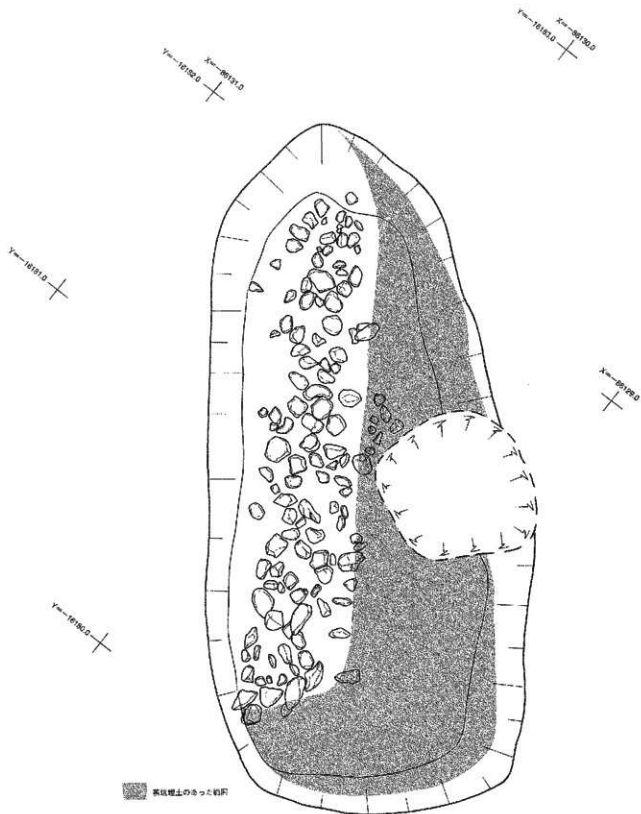


第42図 埋葬施設平面図



- 1 赤褐色砂質土 しまる 赤褐色砂質土の砂状に起る 部本粒のる
 2 赤褐色砂質土 3~5cm大の塊を帯び 湿す
 3 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 4 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 5 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 6 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 7 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 8 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 9 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 10 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 11 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 12 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 13 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 14 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
 15 赤褐色砂質土 しまる 3~5cm大の塊を多く含む
- 9 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す
 10 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す
 11 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す
 12 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す
 13 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す
 14 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す
 15 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す
 16 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す
 17 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す
 18 暗褐色砂質土 暗褐色あり 1~2cm大の塊を少し含む 湿す

第4図 埋設施設断面図



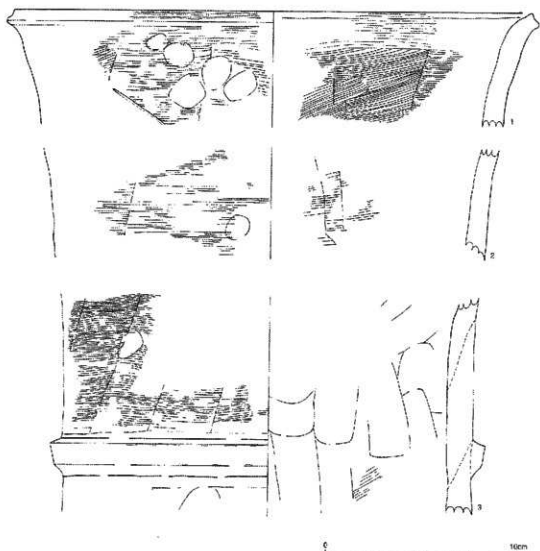
第44区 第1埋葬施設の敷石と墓坑

第六節 出土遺物 (第45図～第49図)

遺物は、埋葬施設からのものは皆無で、墳裾から出土した埴輪片と土師器片のみにとどまる。これらの遺物の出土位置は、墳丘西～北西の周溝内であった。破片の数は少なく、かなりの破片が墳丘から離れた未調査地区へ流失したとおもわれる。

円筒埴輪 胎土や突帯・ハケ目などの特徴から、個体数としては少なくとも3個体あると考えられる。①色調が淡黄白色で、胎土はきわめて目が細かく精良で、夾雑物をほとんどふくまない ②色調は淡黄白色で、胎土は精良だが表面がやや荒れ、やや砂気がある ③色調は暗黄色で、胎土は荒く器表面がもろく剥落する 以上3種の胎土があるが、いずれも焼成は窰窯焼成である。

①は、外面調整は一段目がユビによるタテナデ、二段目以上が二次調整Bd種ヨコハケである。内面調整は丁寧なヨコハケ調整をほどこす。突帯は、上下端の稜ともに鋭い角をもち断面形が長方形に近いもの(第45図3・第46図4)と、上下端の稜がやや突出し断面形台形のもの(第47図)があり、前者の例では突帯端面が平坦に圧迫されていることから、板押圧がほどこされたとおもわれる。口縁は外反し、端面を丁寧に回転ナデし、外端部が下へややさがる。また口縁付近にヘラ記号がみとめられた(第45図1)。器形はおそ



第45図 円筒埴輪実測図(1)

1:1 2)

らく二条三段で、口縁がやや外反するもの、おおむね底部から口縁へむかってやや開く直立ぎみの形態である。またごく部分的に残存する赤色顔料により、本来は赤彩されていたことがわかる。

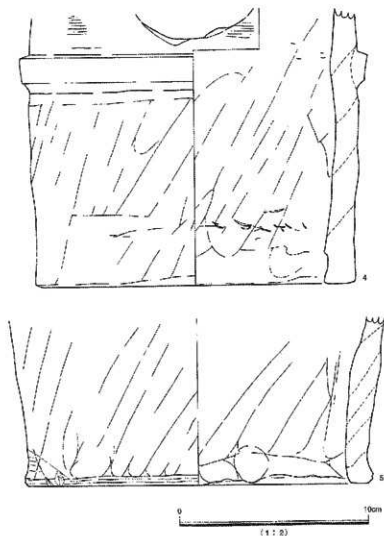
②は、外面が二次調整B種ヨコハケで、突帯は断面形が台形を基調としつつ上端の縁が強く突出し端面がM字状にくぼむ。口縁部片は小片しかないが、外反し、口縁上端部が突線状に内面側へ立ち上がる。器壁は薄い。こうした口縁部片は円筒埴輪のものかどうかはあまり確実でなく、また底部の破片も今回出土せず、当グループの埴輪の詳細は明らかでない。

③は、胎土が悪く、器表面の剥落や摩滅がいちじるしいため、正確な特徴は把握しにくい。口縁は外反するが、端面の状態は不明である。外面は一次調整タテハケ後、二次調整B種ヨコハケである。突帯は断面台形である。突帯剥離部分には、凹線技法による突帯設定の痕跡が観察できる。ごく部分的に赤色顔料がみとめられ、もとは赤彩されていたようである。

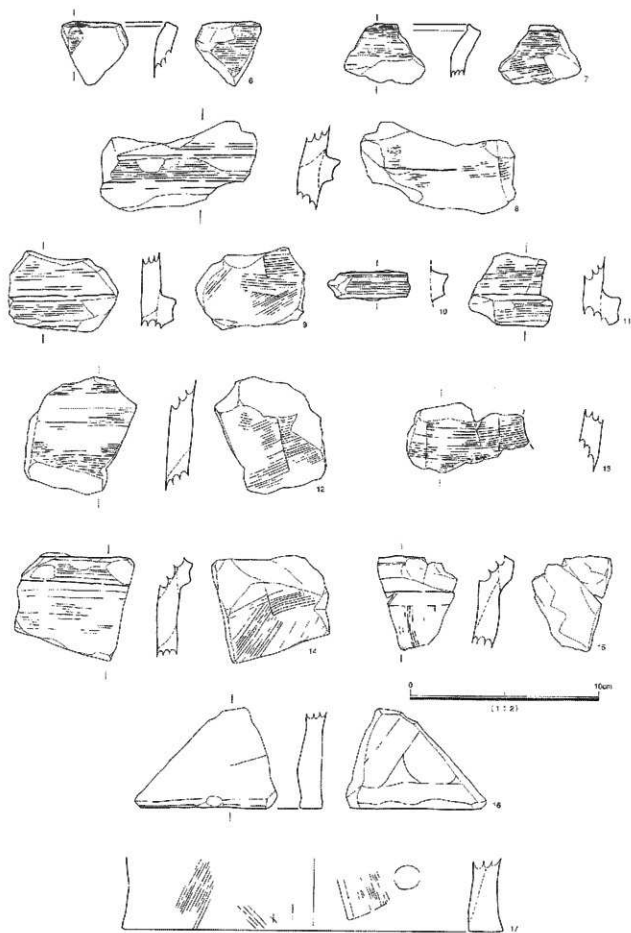
尾張では5世紀後半以降、いわゆる「尾張型埴輪」が一般的に使用され、それ以外の埴輪はほとんどみとめられないが、以上のように15号埴の埴輪はB種ヨコハケをもちい、口縁部が外反するなど、「尾張型埴輪」にはみとめられない特徴をもつ。しかしいっぽうで想定される埴輪の復元形は二条三段でほぼ直立、等分割の突帯間隔など、「尾張型埴輪」と共通する姿でもある。近年の知見によれば、こうしたあり方はど

うやら「尾張型埴輪」出現前段階ないし初期の段階に特徴的な様相である【藤井2003・2004】。近畿地方における円筒埴輪の動向ともあわせて考えると、15号埴の埴輪の時期は、川西編年Ⅳ期、須恵器の編年Ⅱ期で、城山2号窯式期(陶邑TK208~TK23号窯型式併行期)に位置づけるのが妥当である。

土師器(第49図34・35) 小片がわずかに5点ほど出土したにすぎない。そのため器態器形は不明、出土した破片がどの部位に相当するかも不明である。



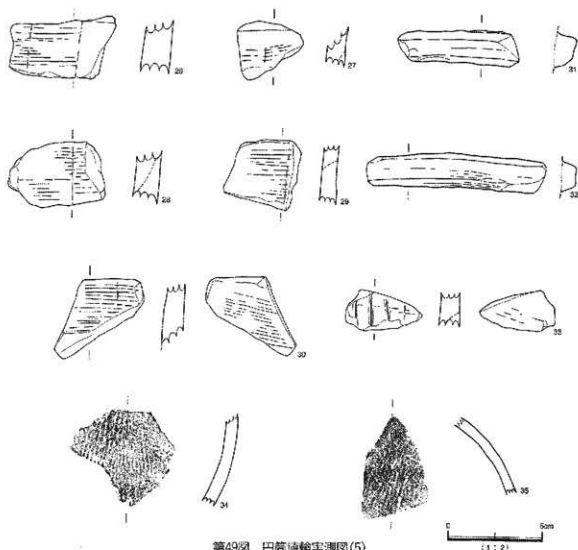
第46図 円筒埴輪実測図(2)



第47圖 円形遺物実測図(3)



第48図 円筒油輪実測図(4)



第49図 円筒埴輪実測図(5)

小結

最後に、ここまでの報告内容から、松ヶ洞15号墳について明らかになった主な事項を要約しておく。墳長12m、墳形は張出部のつく円墳であり、構築墓坑で棺下の墓坑底に敷石施設をもつ舟形木棺と、掘込墓坑に割竹形木棺直葬の2基の埋葬施設が確認された。未盗掘だが副葬品は出土せず、割竹形木棺には水銀朱が塗布されていた。また墳丘の半面ほどをめぐる周溝があり、円筒埴輪片が出土した。古墳の時期は、円筒埴輪により、城山2号窯式期に位置づけられる。

第1埋葬施設が構築墓坑と判明したことは、古墳築造と埋葬施設との関係を追求するうえで重要な発見であった。墳丘構築工程とあわせ具体的な復元的検討がのぞまれる。周溝がほぼ墳丘北半のみにめぐっており、竜泉寺丘陵の北側ないし庄内川からの見た目を意識しているようである。また張出部は造り出しとよびうるほど整備されたものではなく不整形であるが、周溝と同様に北側から見た場合、墳丘の立面観はあたかも前方後円墳をおもわせる。

また円筒埴輪片が墳丘西にほぼ限定して出土したことは、埴輪の樹立位置が元来墳丘西斜面ないし西裾附近であったことをうかがわせる。またその円筒埴輪も、尾張における中期古墳の円筒埴輪としては初期的な様相をしめすとおもわれ、その出現背景を考えるうえで重要な資料となった。

第五章 科学分析— 15号墳第2埋葬施設赤色土の蛍光X線分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

松ヶ洞15号古墳は、守山区の丘陵部に位置する5世紀後半～6世紀始めの古墳である。調査では、第2埋葬施設内の土壌表面において赤みのある部分が検出された。

ここでは、赤色顔料の成分を調べるために蛍光X線分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、墓坑内、西小口側、断ち割り内の3箇所から採取された赤みのある土壌試料である。

測定試料は、これら土壌試料のうち目視で赤みの強い部分を選び出し測定した。なお、墓坑内試料は赤色塊、西小口試料および断ち割り内の試料は岩石表面に付着する赤色部分である。

蛍光X線分析による成分分析は、駒場場製作所製X線分析顕微鏡XGT-5000Type IIを用いた。分析の仕様は、X線管管径100 μ m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500秒で行い、定量分析は標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメータ法）で行った。

3. 結果および考察

測定の結果、墓坑内部分において、水銀HgのほかアルミニウムAl、ケイ素Si、カリウムK、チタンTi、鉄Fe、ジルコニウムZrなどが検出された（図版1）。また、西小口側部分では、アルミニウムAl、ケイ素Si、カリウムK、チタンTi、鉄Feなどが検出された（図版2）。

さらに、断ち割り内では、アルミニウムAl、ケイ素Si、イオウS、カリウムK、カルシウムCa、チタンTi、鉄Feなどが検出された（図版3）。

4. 考察

一般的に赤色顔料は、辰砂からなる朱（HgS）、赤鉄鉱からなるベンガラ（Fe₂O₃）、鉛を熔融酸化して製造された鉛丹（Pb₂O₃）が知られている（山崎、2002）。

墓坑内試料は赤色塊では、僅かであるが水銀が検出されたことから、朱を用いた赤色顔料である。

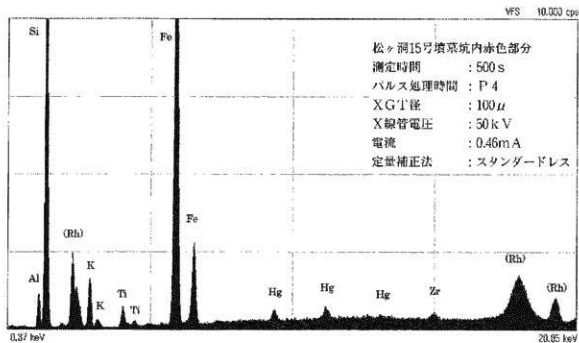
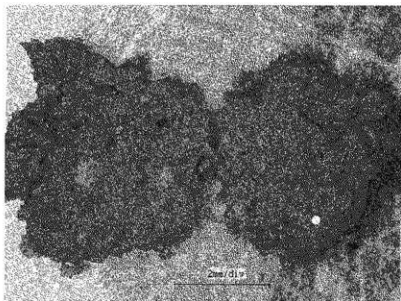
一方、西小口側および断ち割り内の試料は、水銀や鉛などの元素が検出されないこと、また鉄の含有量は高いとは言えないことから、赤色顔料の存在は明らかでない。

なお、水銀は土壌中では全く検出されない元素であるが、墓坑内試料は赤色塊のように約0.19%程度でも感度良く検出されることから、墓坑内試料以外の試料中には含まれていないと考えられる。

こうしたことから、水銀朱は部分的に使用された可能性が考えられる。

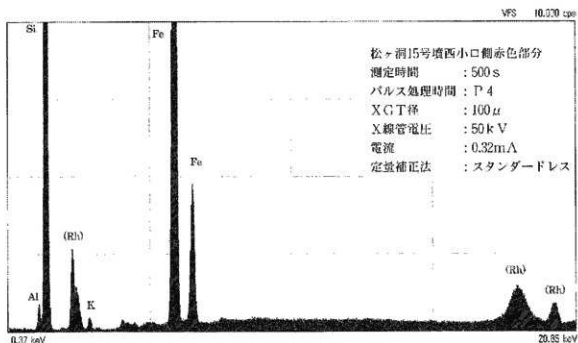
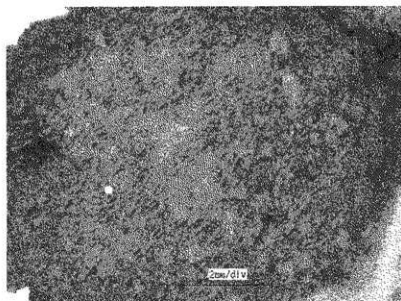
引用文献

山崎 一雄 (2002) 古文化財の科学, 株式会社思文閣出版, 352 p.



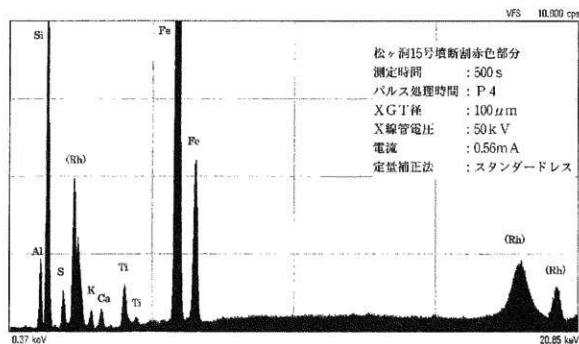
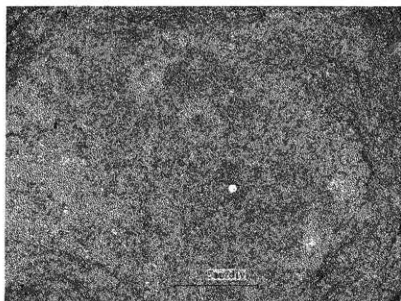
元素	ライン	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps/mA]	化学式	質量濃度[%]
13	Al	K	7.14	0.38	Al ₂ O ₃	13.48
14	Si	K	36.70	0.32	SiO ₂	78.50
19	K	K	1.98	0.09	K ₂ O	2.38
22	Ti	K	0.32	0.03	TiO ₂	0.53
25	Mn	K	0.02	0.01	MnO	0.02
26	Fe	K	3.40	0.06	Fe ₂ O ₃	4.86
40	Zr	K	0.02	0.01	ZrO ₂	0.03
80	Hg	L	0.18	0.02	HgO	0.19
	Σ O		50.26	0.50		

第50図 第2埋葬施設木棺内赤色境の化学組成(分析位置は白丸部)



元素	ライン	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps./mA]	化学式	質量濃度[%]
13 Al	K	2.54	0.18	30.08	Al ₂ O ₃	4.80
14 Si	K	42.22	0.16	1176.84	SiO ₂	90.33
19 K	K	0.25	0.02	16.71	K ₂ O	0.30
22 Ti	K	0.05	0.01	8.55	TiO ₂	0.08
25 Mn	K	0.00	0.00	0.00	MnO	0.00
26 Fe	K	3.14	0.04	1433.12	Fe ₂ O ₃	4.49
40 Zr	K	0.00	0.00	2.09	ZrO ₂	0.00
80 Hg	L	0.00	0.01	0.17	HgO	0.00
8 O		51.80	0.24			

第51図 第2埋葬施設西小口側赤色部の化学組成(分析位置は白丸部)



元素	ライン	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps/mA]	化学式	質量濃度[%]	
13	Al	K	12.37	0.42	44.78	Al ₂ O ₃	23.37
14	Si	K	30.55	0.35	218.52	SiO ₂	65.36
19	K	K	0.57	0.05	12.98	K ₂ O	0.68
22	Ti	K	0.54	0.03	31.96	TiO ₂	0.91
25	Mn	K	0.02	0.01	1.79	MnO	0.02
26	Fe	K	6.76	0.11	954.85	Fe ₂ O ₃	9.66
40	Zr	K	0.00	0.01	1.27	ZrO ₂	0.01
80	Hg	L	0.00	0.02	0.01	HgO	0.00
8	O		49.19	0.55			

第52図 第2埋葬施設断面方割り内岩石付着剥色部の化学組成(分析位置は白丸部)

総括

13号墳・15号墳の発掘調査により、松ヶ洞古墳群の資料は大幅に増加した。まず2000年に調査した14号墳とあわせ、松ヶ洞古墳群形成における築造順序が明らかとなった。まず城山2号窯式期に15号墳が築かれ、つづく東山11号窯式期に、微妙な先後関係は明らかでないが13・14号墳が築造された。松ヶ洞古墳群中央支群は、尾根の先端側に集まる5～11号墳、丘陵頂部側に集まる12～16号墳と2グループに分けてみることができるが、後者の尾根頂部側のグループのほうが築造時期は相対的に古いようにおもわれる。もちろん内容の知りうる古墳のみからみた傾向であり、様相不明のまま消滅した古墳も多く、これを安易に鵜呑みにすることはできないが、大勢としておさえておきたい事実である。また方墳の8号墳を松ヶ洞古墳群形成の契機と考えるような従来の過大評価はあらためて修正される。

従来8号墳で指摘のあった、墳丘西側に須恵器や埴輪を配置するという古墳祭祀のあり方は、14号墳でも確認されたが、今回13号墳・15号墳でも、埴輪の出上位置には同様に考えられる状況がみとめられた。こうした現象が松ヶ洞古墳群で特徴的にみられる意味は何か、またこの現象は松ヶ洞古墳群全体の傾向であるのか、中央支群に限定したものであるか、今後の調査の進展を待たねばならないが、古墳祭祀を検討するうえでの一事例として興味深い。あわせて注目されるのは、13号墳・15号墳ともに、円墳でありながら墳丘最下部に舌状の張出部をもつことである。通常の造り出しのような整備された形態と構造ではなく、不整形で低平なものではあるが、あたかも前方後円墳や造り出し付円墳きながらの墳丘形態をていしている。13号墳ではこの張出部に基石をそなえ、15号墳では周溝をめぐらせて、墳形を明示していた。このこともまた、古墳祭祀や古墳の階層構成の問題に深く関係してくるとおもわれ重要である。

複数埋葬のあった15号墳では、墳丘を築きながら墓坑を形成していく構築墓坑の方法がとられ、そこにおさめた第1埋葬施設の舟形木棺を確認したが、第2埋葬施設を造る際には墳丘盛上を掘り込んで埋葬をおこなっていた。しかもこの第2埋葬施設の掘り込み面は最終段階の墳丘表面ではなかった。第2埋葬施設を被覆した盛土は、同時に第1埋葬施設の被覆土をも覆っており、まったく異なる埋葬施設の構築方法ながら、その先後関係は盛土の工程差であったわけである。そうすると第1埋葬施設は、木棺被覆土がほどこされた後、第2埋葬施設が掘り込まれるまで、上部の墳丘盛土が覆まれず完全に埋没しないままであった時間が存在することになる。

埴輪についても、15号墳でいわゆる「尾張型埴輪」出現期の様相を示唆する資料が出土したことは重要である。13号墳や8号墳で「尾張型埴輪」の事例が得られているため、その出現から展開過程を検討するうえで標準的な資料群となることとおもわれる。

以上、十分に意を尽くせてはいないが、今回13号墳・15号墳とつづけての松ヶ洞古墳群における発掘調査では、多くの興味深い成果を得ることができた。紙幅などの都合もあってはいえ、重要な成果を得ながら、本報告で具体的な検討と意義づけをすることはできないのは報告者の力量不足というほかに、誠に残念である。それについては後日を期すこととし、まずは事実報告の責を果たして本報告を終えることとする。

引用・参考文献

- 一瀬和夫1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大木川改修にともなう発掘調査概要』V 大阪府教育委員会
- 一瀬和夫1995「コラム① 埴輪にみる「陵墓」研究」『「陵墓」からみた日本史』日本史研究会・京都民科歴史部会 編 青木書店
- 伊藤禎樹1972「尾張の大型古墳」『考古学研究』第19巻第2号 考古学研究会
- 犬塚康博1998「第四章 古墳時代」『新修名古屋市史』第一巻 新修名古屋市史編集委員会
- 榎印旛都市文化財センター1994「吉高浅間古墳発掘調査報告書」
- 小栗鑑次郎1932「愛知県内古墳地名表」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第十
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 豊田市教育委員会2001『三味線塚古墳』
- 名古屋市教育委員会1966『守山の古墳 調査報告第一』
- 名古屋博物館1984『守山の遺跡と遺物』（部門展「身近なまちの考古学—守山の遺跡と遺物」展示図録）
- 服部哲也2001「松ヶ洞14号墳」『埋蔵文化財調査報告書』39 名古屋市教育委員会
- 藤井康隆2002「古墳時代中期における尾張の首長墳と小古墳」『古墳時代中期の人形埴輪と小型埴輪—初期群集埴輪の出現とその背景—』発表要旨編 第10回東海考古学フォーラム浜北大会実行委員会
- 藤井康隆2003「尾張型埴輪」の諸問題『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 藤井康隆2004「尾張型埴輪成立期の様相」『勢濃尾』第3号、勢濃尾研究会
- 守山市教育委員会1963『守山の古墳』



古墳全景（南東より）



墳丘西面の築石



古墳全景（北より）



墳丘北面の葺石



墳丘北西の葺石



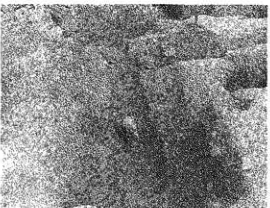
墳丘西面の葺石



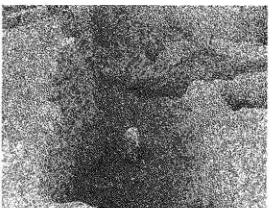
南溝出部の葺石(1)



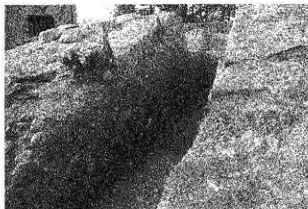
南溝出部の葺石(2)



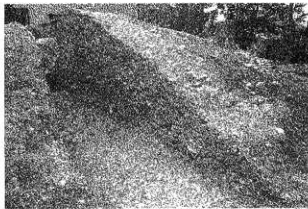
埋葬施設（南より）



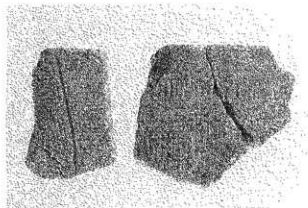
埋葬施設完結後の墓坑



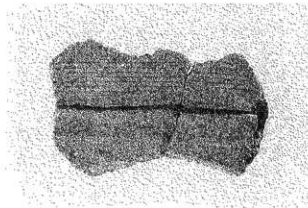
C-Sライン断割り断面



C-Eライン断割り断面



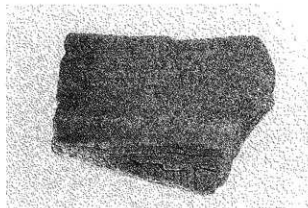
円筒埴輪片(1)



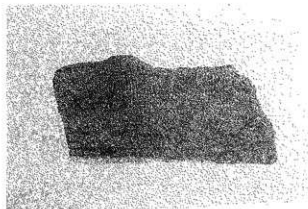
円筒埴輪片(2)



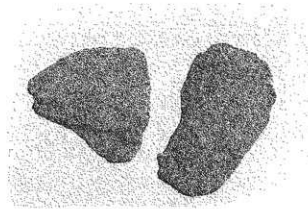
円筒埴輪片(3)



円筒埴輪片(4)



円筒埴輪片(5)



土師器片



墳丘全景（北より）



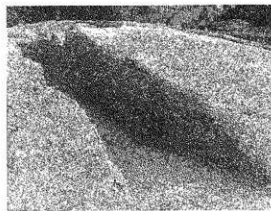
第1埋葬施設（南東より）



埋葬施設発掘全景 (美・第1、手前・第2)



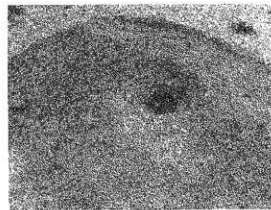
墳丘全景(北東より)



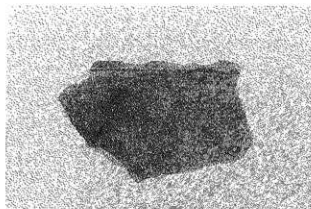
T2 西壁断面



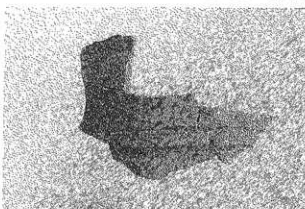
T4 東壁と炭壁断面



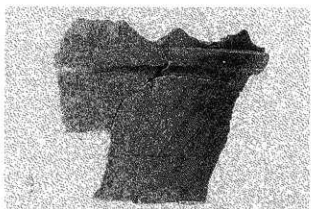
第1埋葬施設墓床平面プラン検出状況



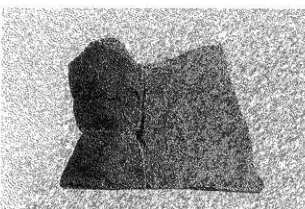
円筒埴輪①グループ 口縁



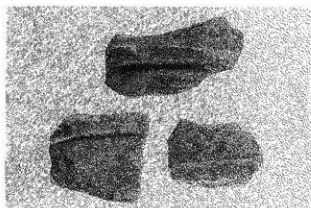
円筒埴輪①グループ 2段目～1段目



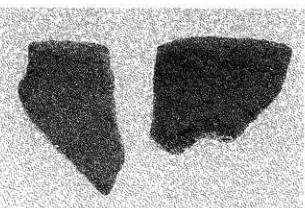
円筒埴輪①グループ 1段目



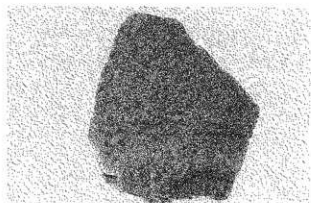
円筒埴輪①グループ 基部



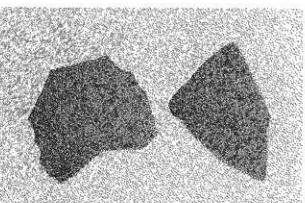
円筒埴輪②グループ



円筒埴輪③グループ 口縁



円筒埴輪③グループ (突帯剥離)



土師器片

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	埋蔵文化財調査報告書						
副書名	松ヶ洞古墳群 (13号墳・15号墳)						
巻次	52						
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告						
シリーズ番号	66						
編著者名	藤井康隆、深谷淳、藤根久						
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館						
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋南区見晴町47 TEL (052)823-3200						
発行機関	名古屋市教育委員会						
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL (052)972-3268						
発行年月日	2005年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査原因
松ヶ洞13号墳	名古屋守山区大字 吉根字松洞3254-139	23100 1-116	35° 13' 23"	136° 59' 19"	2004.1.13~ 2004.2.27	400 ㎡	集合住宅建築
松ヶ洞15号墳	名古屋守山区竜泉寺 二丁目1021	23100 1-118	35° 13' 27"	136° 59' 25"	2004.5.10~ 2004.6.11	100 ㎡	集合住宅建築
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
松ヶ洞13号墳	古墳	古墳時代	円墳(埴石、木棺直葬)		埴輪・土師器・ 須恵器	墳丘南北に張出部をもつ	
松ヶ洞15号墳	古墳	古墳時代	円墳(周溝、敷石舟形木棺・木棺直葬)		埴輪・土師器	墳丘東面に張出部をもつ	

名古屋市文化財調査報告66

埋蔵文化財調査報告書52

(松ヶ洞古墳群 13号墳・15号墳)

2005年3月31日

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育委員会

印刷 愛源株式会社

